
M大写真部副部長の喧騒

柏木杏花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M 大写真部副部長の喧騒

【Nコード】

N0777Z

【作者名】

柏木杏花

【あらすじ】

M 大写真部。ここは個性が強すぎる後輩が、むやみやたらと集まってくるサークルだ。絶世の美女にしか見えない一年男子とその彼女。その彼女の辛辣な女友達。ブログの女王に、鉄道マニアの撮り鉄。こんな写真部の副部長を、なぜか平凡きわまりない俺がつとめている。いろいろあるけど、それなりに平和にやってきた。だがある日、俺に許嫁が湧いて出た。しかもその許嫁が小学生ってなんぞなんだ！俺は自慢じゃないけど十歳年下より、十歳年上の方がいいんだよ。こういう価値観って十年後も二十年後も、変わらない

と思ってるのに！ そんな事情で、婚約解消という名のハッピーエンドに、いざ突き進む…つもりだったんだけど……。イマドキの草食男子、松浦惣介のだいたいドタコメ。ちょっとラブコメ。軽くて楽しい話がお好みの方は、お試しください。

第一話

突然の婚約話

「惣介、ちよつと惣介」

「はあ？ なに？」

その日、土曜日の午後だというのに、珍しく家でゴロゴロしてたのが悪かったのか、晩ごはんを作ってるお袋にからまれた。

俺は松浦惣介。^{まつうらそうすけ}M大経済学部三年、写真部副部長。他に特筆すべき事柄は、あいにく持ち合わせていない。

自分で言うのも虚しいが、どこにでもいる普通の大学生だ。

「いい若者がいたらと鬱陶しいわね。あんた、つきあってる彼女とか、いないの？」

「いないよ」

リビングのソファーに寝そべり、雑誌に目を落としたまま、俺は生返事だ。彼女がいたら、土曜に家でゴロゴロしてるわけがない。

平和だ。平穏だ。平凡だ。

子どもの頃から住み慣れた住宅街の一戸建て。夕飯の準備にいそしむ母親から多少からまれたとしても、どうってことはない。

この日はM大の学祭が終わって最初の土曜日だ。副部長という名ばかりの肩書のせいで、写真展ではメインで働いてきたから、家でこんなにのんびりするのも久しぶりだった。

もっとも今夜は写真部の打ち上げコンパだから、夕方には出かけるのだが。

「情けないわね。せつかくひとが、そこそこイケメンに産んであげたつてのに、覇氣がないつたら……」

覇氣がないのは、まあ認める。万事無難つてのは、俺の個性なんだよな。無難が個性つてのはちょっと変か。

だいたい、イケメンにそこそこつて付けてる時点で、産んだ本人も息子を平均点だと評価してるつてことだ。親の欲目つてのはないのかな。

「まあでも、ちょうどいいわ」

「なにが？」

「実はあんた、許嫁がいるのよ」

「はあ~~~~~？」

平凡な俺の、平凡な人生は、こんなひと言で転がり始めた。

許嫁……？

許嫁つて、もしかして、もしかしくなくても、婚約者みたいなもんだよな？　みたいというより、そのものなんだろうけど、いきなり許嫁の存在を突きつけられた男なんて、この程度は取り乱すだろう。それにしたつて、この平成のご時世に、結婚相手を親が決めるなんて、一般庶民があり得るの？　あり得ないよなあ。

「母さん、それ、なんの冗談？」

手に持っていた雑誌をテーブルの上に放り出して、俺は座り直した。対面式のシンクで料理の下ごしらえの手を休めることなく、お袋は平静を保っている。

「冗談なんかじゃないわよ。どうせあんたのことだから、だれが相手でもたいして変わらないんでしょう。ならいいじゃない」

「違うないわけないだろ。なに言ってるんだよ。だいたい、俺まだ大学生なんだから、結婚なんてあり得ないし……」

「だれがいますぐ結婚しろなんて言ったのよ。婚約よ」

そんなに違わないだろ。いますぐか、あとかの違いじゃないか。

「とにかく、相手くらい自分で探すから、許嫁とか完全に却下だからね」

「ものすごく可愛い子なのよ。気にならない？」

「ならない」

「ほら、それよ」

それって、なんだよ。勝ち誇ったみたいに、ふんぞり返って。

「普通、年頃の男子大学生が、許嫁がいて、その子が可愛いって訊けば、どんな子が気になるはずじゃない。それが間髪入れずに気にならないって言い切るのは、おかしいわよ。異常よ。非常識よ」

「非常識なのは母さんだろ。だいたい、万が一『気になる』とか言

「つたら、一気になだれ込んで結納の日取りは……とか決めかねないじゃないか」

そんなトラップに引っかかるほど、俺も伊達に二十一年間、お袋の息子をしてはいないんだ。

「……まさか惣介、あんたホモか不能じゃないでしょうね」

言うに事欠いて、なんて推測をしゃがるかな、このおかんは。

「で、どっちなの？ 白状しなさい」

ちよつと待て。なんで二者択一なんだよ。

「どっちも違います！」

いい加減、怒鳴りたくなってきたが、あいにくチャイムが鳴ったので、俺は気を削がれた。

「惣介、出てよ。いま手が離せないわ」

今夜のおかずはハンバーグか餃子なんだろうな。お袋の手が、ひき肉の油でテカテカに光っていた。

第一話

突然の婚約話（後書き）

はじめまして。お読みいただいて、ありがとうございます。

もう少し煮詰めてから投稿したかったのですが、結局、見切り発車です。

できるだけ、2、3日以内に更新していきたいのですが、途中で止まるかも（<―>、）

4日以上間が空くときは、活動報告でお知らせします。

久しぶりのコメディーですけど、読んだ人がコメディーのジャンルに入れてくださるのか、妙に不安な船出です。

お気づきのことなどありましたら、教えていただけると嬉しいです。明日も更新予定です。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！

俺は頭を掻き毟りながら、不承不承、玄関に向かった。扶養家族の分際は盛大に辛い。ドアを開けると、待っていたのは斜め向かいに住む女の子だった。

学年は確か、小学五年生だったよな。いまどき、ませた子も多い中で、小柄でおさげなもんだから、年より幼く見える。

「凜ちゃん、どうしたの？」

「雄介くんいる？」

雄介は俺の弟だ。二歳年下で、四月からF大に通っている。大学生に小学生が『くん』づけで呼んだりするんだが、凜は俺にも『惣介くん』だ。これは、凜の親が俺ら兄弟をそう呼ぶからである。小さい子どもは、親の呼び方をそのまま真似するからな。

呼び方が変わるの、中学に行って、部活とかしてからなんだろうなあと、俺は思ってる。べつにいまの呼び名も嫌じゃないし、構わないんだけど。

生まれたときから知ってるし、家族の延長みたいな存在だ。

「いま、バイトに行ってるよ」

「そっかあ。残念」

「どっかしたの？」

「算数の宿題、わかんないところあるから、教えてもらいたかったの」

そういえば雄介が、ときどき、凜の勉強みてるって言ってたな。

「俺でよかったら、みてあげようか？」

「いいの？」

「いいよ。どこ？」

教科書が出てくるのかと思えば、凜が手にしているのは小学五年生のドリルだった。なんとも懐かしい代物だ。裏返すと『しょう野りん』と小学生らしい文字で名前が書かれてある。まだ習っていない漢字はひらがなだから、庄野凜とは書けないらしい。

わからないという問題を指差されて、俺は唖った。時間と距離の応用問題だ。これは確かにちよつとややこしい。少なくとも、紙に図を書いてあげないと、わかるようには説明できない。

こんな玄関先で机なんかあるわけないし、やっかいだな。そんなことで思案していると、お袋がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「惣介、どなただったの……あら、凜ちゃん。ああ、宿題しに来たのね。あいにく雄介は留守だけど、惣介でもどうにかなると思うし、上がって教えてもらいなさい」

「母さん、F大よりM大の方が偏差値、上なんだけど……」

「自分で問題を解くのと、ひとに教えるのは別よ。あんたは苦労もせずに理解しちゃうから、わからない気持ちかわからないのよ」

さすが母親。案外、鋭い。実際俺は、理解が早いと言われている。苦手な教科もないが、得意な教科もない。

雄介は苦労して理解する奴だから、一度身に着けた知識は大事に

するし、好き嫌いもはつきりしている。小学生に勉強を教えるのは、雄介みたいな奴の方が、向いてるのかもな。

わざとらしく肩をすぼめて見せてから、リビングに行こうとして、お袋に腕を掴まれた。

「四時から韓流ドラマがあるの。全力で見ないと命にかかわるから、自分の部屋で教えてあげてね」

それでこんな早い時間から、ひき肉をこねくり回していたのか。

「間違い起こしちゃ駄目よ」

相手は小学生だぞ。どんな間違いがあるって言うんだ。

「惣介くん、間違いってなに？ 算数？」

「……間違いなんか全然ないから、大丈夫だよ」

凜の頭をなでながら、俺は溜め息をついた。

凜は俺の部屋に入ると、もの珍しそうにキョロキョロした。そういえば、俺の部屋に入るのは初めてなんだ。親同士が懇意にしても、それぞれの子どもは年も離れているし、それが普通だろうけどさ。

「写真がいっぱい」

壁のボードにはぎっちり写真が貼り付けてるし、机や本棚の空い

てる場所にはフレームに収まってる写真が所狭しと置いてあるから、写真まみれに見えるんだろう。それでも飾ってあるのは、ほんの一部なんだが。

「写真部だからね」

中学からさほど変わり映えがしない部屋は、ベッドと勉強机、あとは壁の本棚しかない。

納戸からコタツ机と座布団を持ってきてもいいんだが、どうせ宿題も二、三問教えればいいだけだろうし、面倒だ。俺は凜を勉強机に座らせて、雄介の部屋から椅子だけ持ってきた。隣に腰かけると、凜が愉しそうに笑った。

「家庭教師のコマーシャルみたい」

言われてみればそうだな。

「雄介に教えてもらうときは違うの？」

「雄介くんは一階で教えてくれるよ」

そうだな。そんなに頻繁でもないみたいだし、今日だってこんな問題じゃなきゃ玄関先だってかまわなかった。

凜がわからなかった問題は、だれでも躓く問題だ。^{つまづ}1時間70分は130分。1.8キロメートルは1800メートル、と考えなければ解答できない。けれど、130分は何時間何分ですか？という問題に慣れているから、分に戻す発想になれないんだろう。

凜は最初こそ首を傾げていたが、途中で「あ、そっか、わかった」と声を弾ませた。

理解力が高い方ではないが、集中力はあるみたいで助かった。

他の問題も同じ応用で解けるものだったから、宿題は案外あっさり、終わらせることができた。

「惣介くん、ありがとう」

「どういたしまして」

持ってきた荷物を手提げ鞆に詰めると、凜は机の上のフォトフレーム手に取って呟いた。

「このお姉さん、すごく綺麗」

「ああ、そうだね」

俺は頷いた。綺麗なのは間違いない。ただ、お姉さんではなくて、お兄さんだけど、小学生に説明するのも面倒なので細かい情報はスルーだ。

「惣介くんが撮ったの？」

「そうだよ。大学の後輩なんだ」

「へー、大学の女のひとつで、みんなこんなに綺麗なの？　なんかアイドルみたい」

「その子はちょっと、特別だよ」

この写真は久しぶりに納得できるものだったから、自分でも気に入っている。一番、目につく場所に置いておきたいくらいには。

「凜ちゃん、おばさんまだ帰ってないの？」

「うん。今日は夜勤なんだって」

慣れているのか、寂しさを表情に出さないのが、かえって痛々しい。一人っ子だから、家に帰っても誰もいないんだよな。

凜の母親は看護師で、夜、帰れない日もあるらしい。いや、今日は土曜日だ。親父さんはいないのかな。

「俺はこれから打ち上……」

打ち上げコンパと言いかけて口を噤んだ。小学生にはわかりにくい言葉だと思い、言い直す。

「えっと…飲み会に行くけど、しばらく下にいる？ お袋と韓流ドラマ観なきゃいけないけど」

「ううん、帰る」

一人で待つのは慣れてるのかな。そもそも一人でいるのが寂しいのか、羽を伸ばせて愉しいのかもわからないんだよ。俺だってかつては小学五年生だった時期があったはずんだけど、なにが出来て、なにが出来ないのか、さっぱり思い出せない。

俺の場合、これくらいのときは、ほとんどお袋が家にいたし、雄介もうるさくまとわりついてたからなあ。

「お父さんがもうすぐ帰ってくるから」

「そっか」

「飲み会ってなんか、お父さんみたい」

小学生からしたら、俺らのすることなんか父親と変わらないんだろうか。実際、来年就活が本格化して、うまく内定をもらえば、再来年は社会人だ。

やることなすこと、父親世代と同じになる。そうになると、お袋が言った婚約者も現実味を帯びて迫ってくるのかな。

俺はうんざりした気分で溜め息をついた。

「どうしたの？」

「ああ、いや、さっきうちのお袋が、許嫁がどうのこうのって言うてたんだ。まあ、冗談なんだろうけどね」

小学生相手に、なにを愚痴こぼしてんだろ、俺は。

「許嫁の話、まだ訊いてなかったの？」

「？ 凜ちゃん、なんで知ってたんの？」

「なんでって、惣介くんの許嫁、あたしだから……」

お袋が言ってた、ものすごく可愛い許嫁って……凜……？

そりゃ、可愛いだろう。小学生なら、たいていは。

俺がその場で卒倒しかけたことは、言うまでもない。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！（後書き）

第三話

学祭打ち上げコンパ

「お疲れ様」

「無事終わってよかったね」

「かんぱい」

M大から一駅のこの居酒屋は、写真部がコンパでよく利用するチェーン店だ。

新入生歓迎コンパ、学祭打ち上げコンパ、卒業生追出しコンパ、この三つをここで行うのが慣例になっている。二階を貸し切ることができるので、気兼ねなく騒げるのだ。

今日参加しているのは、全部で十五人ほど。

四年は内定をもらっているか、大学院に残ることが決まっている者しか来ていないので、他のコンパに比べると出席率は低い。

「今年は本当に良かったよな。去年とは比べ物にならないくらいデキも日程も立派なものだったぞ」

自嘲気味に頭を掻いて苦笑するのは、隣に座っている篠崎部長だ。学祭は二、三年が中心になって運営するから、四年の部長は、去年メインで動いていた。

学祭で、写真部は個人写真の展示会とは別に、小さな写真をモザイク状に貼り合わせて巨大な名画を制作するのがここ数年、恒例になっているのだが、その名画が特に好評だった。

「佐々木が頑張ってくれたんで」

俺が名画の責任者をねぎらうと、向かいに座る佐々木は照れくさそうに首を振った。

「いや、写真が早い段階で集まったからできたんすよ。亜衣ちゃんのおかげです」

がっしりした体格で、色も黒いから熊みたいなやつなんだが、こいつは写真部の有望株だ。カメラの腕もさることながら、フォトシヨップをデザイナー並みに使いこなす必殺技を持っている。全然似合わないのに……。

どう見ても、ラグビーか柔道でもやらせた方が、向いてそうに見えるんだけどな。

「訊いたよ。ブログの女王が、モデル集めに協力してくれたそうだな」

ブログの女王、外村亜衣とむらゐいは、今日のコンパに来ている。写真部ではないが、学祭で多大な協力をしてくれたので、感謝の意を表して招待したというわけだ。

「ほんと。亜衣ちゃんには超感謝だね。写真部は、足向けて寝られないよ」

亜衣に手を合わせて拝んでいるのは、小畑こはたさくらだ。文学部二年。飲み会好きのお祭り娘。明るく元気で、性格は少々辛辣ってところかな。

どうでもいいけど、いつまで拝んでいるんだか。あれじゃ亜衣は仏像扱いだ。

案の定、拝まれている本人は、盛大に嫌そうな顔をしている。

「さくらさん、拝まないでください。まだ生きてますから」

亜衣も似たような感想を抱いたのか、迷惑そうに頬を引きつらせていた。さくらは念仏でも唱えそうな勢いだっただもんな。

でも、なんだかんだ言っても仲は良いよ。亜衣も学年は一年だけど、さくらと同じ文学部だし。文学部の女子は、しゅっちゅうつるんでるよな。よほど、気が合うんだろう。

「とにかく、今年は亜衣ちゃんのおかげで、写真部も勉強になったよ」

「え？　そうなんですか？」

意外そうに首を傾げる亜衣の顔は、正統派の美人だ。ちょっと欠点が見当たらない。陽気で人当たりもいいから写真部の中にも、ひそかに思いを寄せてる奴がいるんじゃないのかな。

「ブログで告知すれば、写真部の活動も周知できるし、賛同してもらえるんだってわかったからね」

「確かに去年までは思いつかなかったよな。学外のひとに、大々的に名画のモデルになってもらおうなんて」

腕を組んだ部長が、感心しきりで何度も頷いている。

名画を制作するのに、千枚近くの写真を貼り合わせるのだが、その一枚一枚にひとを入れる。言わば証明写真を繋ぎ合せるような作業だ。

去年までは、ほとんどが学内の学生に頼み込んで撮影していたから、数を揃えるのが大変だった。搬入ぎりぎりまで部長や俺ら数人

が大学に泊まり込んで、最後は自分たちで撮り合いながら穴を埋めていく、地獄のような修羅場だったのだ。

ネットをいかに活用するか、この辺のことは、また来年の課題だな。けれど、布石を置けたのは大きな収穫だった。俺は感謝の気持ちで、亜衣のグラスにビールを注いだ。

「ところで部長、就活は終わったんでしょ？」

「おかげさんで」

「おめでとうございます……って二回目なんですよね、お祝い言うの。春に内定もらったのに、就活続けてたってことは、納得してなかったんですか？」

部長がジョッキを傾けるのを、俺は久しぶりに見た気がした。実際、長い間、一緒に飲む機会がなかったんだよね。

「まあな。やっぱり、ちょっとでも理想に近いところを目指したかったし」

「耳が痛いですよ。俺もカウントダウンが始まってますから」

「松浦、お前は話が来てんだろ？ 学祭の写真にどっかの出版社が興味を持ったって訊いてるぞ」

「ええ、ありがたい話なんですけど、あれはモデルの力ですからね……」

学祭で好評だった名画の取材に来ていた雑誌社が、ついでに見ていった写真展で、俺の写真に興味を持ってくれたというわけだ。で、その写真のモデルが……、

「瀬戸柚希せとゆずきか。そういや、あの子の正体訊いたときは、正直、腰が抜けるほど驚いたぞ」

部長は、少し離れた場所に座る柚希を眺めて、大きく唸ると首を傾げた。

「いまだに信じられん。あの絶世の美女が男とは……」

「同感です」

俺の部屋にある写真は、夏休みに写真部の後輩を写したもののなんだが、その後輩が柚希だ。凜が「このお姉さん、凄く綺麗」と言った、あの写真である。

柚希が抱える問題は極めて複雑怪奇で、説明すると長くなるが、ひとことと言うとしたら、現在の柚希は女装の達人ってところかな。現に今日も、読者モデル並みに可愛らしくセンスのある着こなしを披露している……らしい。ここに着いた途端、女の子に囲まれて、そう騒がれていた。俺にはイマイチよくわからないが。

法学部の一年。亜衣とは中学からの同級生だ。

柚希は一時、悩みを抱え込んでいた時期があって、相談に乗ったりしていたから、俺にとっては妹みたいな存在である。男だけ……。

「男にしとくの、勿体なさすぎだろ、あれは」

「部長には、長年連れ添った彼女がいるでしょうが」

「長年過ぎて、空気みたいだけどな」

確か、半同棲状態と訊いたような、訊いてないような……。

「そんなに長いんですか？」

「小中高、一緒だよ」

「それじゃ、幼なじみの域ですね」

「まあな。つきあい始めたのは中学に入ってからだけど」

お互い、成長過程を見届けた者同士の恋愛とは、いかなるものな
んだろう。正直、想像できない。空気みたいと言われても、それも
考えられないよ。

「結婚とか、考えるんですか？」

「考えないと言ったら、嘘になるな。他のだれかと……とは到底思
えないし、いずれ時期が来れば、あいつと一緒にになるだろ」

「小学校のときから、意識してました？」

「いや、からかって遊んでたな」

だよな。小学生で恋愛とか結婚なんて、考えないよな、普通。結
果として小学校からの同級生が結婚相手になることがあってもさ。
俺だって、小学生の時に、それなりに好きな女の子くらいはいた

はずだけど、いまは顔も思い出せないし。

凜に「許嫁って、あたしだから」と言われたあと、我に返った俺は、お袋に怒鳴り込もうとして、かろうじて止めた。韓流ドラマに相對しているお袋の邪魔をしたら、どんな祟りがあるかわかったもんじゃない。

あのひとは我が親ながら、正気の沙汰とは思えないようなところがあるからな。俺の忍耐力は、あの母親の所業が育んだものかもしれない。

俺はビールのジョッキを傾けながら、肩を落とした。

まさかあの婚約話が真剣なものじゃないだろうけど、凜の耳にも入ってるのが気になる。凜が知ってるってことは、向こうの親も絡んでるってことだよな。うーん、どうなってんだろ。

「どうかしたのか？ 元氣ないな」

部長が肩を組んで寄りかかってきた。からんでるのが酔ってるのか、どっちなんだろう。しかしこのひと、眼鏡がよく似合うよな。なんかこう、科学者っぽい印象だ。期待を裏切らない理学部だけど。

「部長、実は俺、婚約してるらしいんですよ」

「はあ？」

「その婚約相手っていうか、許嫁が小学生なんですよ」

「はあ〜？」

「俺、どっちかっていうと熟女の方が好きなんですけど、どうしたらいいんですかね？」

「……お前、良いとこの坊ちゃんが穏やかな人生送ってます、てな感じに見えたけど、隠れ波乱万丈タイプか？」

「なんですか、その隠れ肥満みたいなたえは」

「いやでも、本当にそう見えるしなあ……」

部長は、にやにやと人の悪い顔で、口の端に笑みを乗せた。面白がってるな、これは。

「でもな、別に、ややこしいことないだろ。嫌なら断ればいいだけじゃないか」

「うちの母親の恐怖を知らないから、そんなこと言えるんですよ」

「なんかよくわからんが、それなら、彼女を家に連れて帰ってみる。一発でご破算になるって」

「今、彼女いないんです」

「あれ？ 確かいたはずだろ？ 美大かどつかの……」

「春先に別れて、それから独り身です」

「すぐ作れよ。ちゃっちゃと」

「無茶言わないで下さいよ。晩メシじゃあるまいし、すぐ作ったり

できません」

「根性が足りないんだよ、モテないわけでもないのに。とりあえず、いないなら誰か適当な子に頼め。同伴帰宅してくれってな。写真部の後輩でもいいんじゃない？ 綺麗どころが揃ってるじゃないか」

「うーん……………」

酔っぱらいの戯言とはいえ、なんか説得力あるなあ。しかし、同伴帰宅って正しい日本語なのか？ もうちょっと適切な言葉、ないわけ？ なんか響きが、いかがわしい気がするんだけど。

まあ、お袋の話なんか全然本気にしてないし、無視しとけばいいんだろうけど、凜をすでに巻き込んでるのが気になるんだよ。俺としては、とにかく、穏便に済ませたいわけだ。

しかし、酔ってる部長が寄りかかっていて、いいかげん重い。

「佐々木、佐々木」

俺は佐々木を手招きして呼び寄せると、つつかえ棒係を贈呈した。よし、身が軽くなったぞ。

佐々木は不服そうな顔をしていたが、お前のその有り余る筋肉を有効利用しないでどうするんだ。

俺は佐々木の肩を叩いて、言い訳するように席を立つと、トイレに向かうことにした。

第三話

学祭打ち上げコンパ（後書き）

第四話

大迷惑な源氏物語

ちよつと酔いを醒まして、二階に戻る。

宴もたけなわ。部屋中にアルコールと料理の匂いが充満し、酔っぱらった部員たちが、ふらふらと身体を揺らしていた。

これくらいの時間帯になると、元いた場所から各自、動き回り、気の合う者同士が、気の合う話に花を咲かせている。

出入り口の横では、さくらたちが固まっていた。かしま姦しくも女の子四人かと思いきや、柚希が混じっていた。と言っても、女子会の雰囲気^かを損ねるようなものでは、まったくくないな。両手に花という感じでもないし、完全に溶け込んでいるのが笑える。

「あ、副部長、こつちに座りませんか？」

さくらに呼ばれて、俺はその女子集団に突入することになった。

さくらに亜衣、柚希は前述のとおりだが、もう一人は松浦碧だ。まつづらあおい

碧は文学部二年。この中では、最も長い時間を共有した後輩だが、俺はいまだに碧のことがよくわからない。華奢で童顔。初対面のひとからは高校生に見られているだろう。鎖骨まで伸びた髪がくせ毛で、可愛いといえば可愛い子なんだが、天然でふわふわしていて、どこにピントが合っているのかわかりづらい。

そう、糸のない風船みたいな感じかな。まあ、そういうところも、この子の魅力なんだろうけど。

「何の話で盛り上がったの？」

「源氏物語です」

……それって、盛り上がるようなネタか？

「光源氏の本命は、藤壺か紫のどっちだろうって、現在、白熱したバトルを展開中なんです」

「はあ……？」

不覚だ。

あまり…というか、全然面白くないグループに紛れ込んでしまった。

「わたしは藤壺派で、亜衣ちゃんは紫派なんです。副部長はどっちですか？」

なんかこの、有無も言わさぬ強引な二者択一、誰かを思い出すぞ。しかし、こんな話題で派閥ができてんのか。政治家も真っ青だ。

源氏物語って言われても、ほとんど知らないんだよな。とはいえ、一応上級生として、知らぬ存じぬでは格好悪いか。えっと確か、男前の光源氏が、次々に女を食い散らかす話だったよな。

紫は、子どもの頃から手元に置いて育てた理想の妻で、藤壺は父親の後妻で、憧れの存在……で間違いないかな？

「柚希ちゃんは、どっちなわけ？」

この中では、一番冷静で常識的な感性を持ってそうな、柚希の意見を参考にさせてもらおう。似たようなことを言っておけば、場違いにはならないはずだ。

「源氏物語はちゃんと読んでないんですけど、紫に対する行為は、未成年者略取誘拐にあたる可能性があると思うんです」

ひええええええええ、源氏物語が、未成年者略取誘拐かよ。そうか。法学部だもんな。情緒もへったくれもないな。

「でも、藤壺は父親の後妻ですから、血が繋がっていないとはいえ、直系血族です。よって、父親が亡くなっても、婚姻関係を結ばせん。民法第734条に違反します。したがって、藤壺、紫、どちらも賛同できません」

……………そうですね。そうですね、はい。…いや、なんか違うぞ！

眩暈がしてきた。

「そもそも、どうして最初の妻をもっと大切にしなかったのか、そこが理解できないんです。謎に満ちた物語ですね」

柚希の方が、よほど謎に満ちている。というか、酔っぱらってるんじゃないの、この子。派手な顔して、あんまり強くないんだよな、アルコールに。いや、顔は関係ないか。うーん、俺も酔っぱらってるのかな。

そういえば、光源氏の最初の妻ってだれだっけ？ 全然思い出せないなあ。

柚希の隣で、なぜか碧がそわそわと落ち着かない様子で、ビールを口に運んでいる。どうしたんだろう。

しかし、次々に無差別恋愛を繰り返すのが、源氏物語だろう？ 最初の妻を愛でて終わったら、それはもう、源氏物語とは呼べないのではないか？

残念ながら、柚希の意見はまったく参考にならなかった。この理知的な後輩が戦力外とは、きわめて遺憾だ。しかたがないので、俺

は碧に視線を向けた。

「碧ちゃんは？」

先に碧の意見を訊けばよかった。碧は文学部だから、あんな奇想天外な意見にはならないだろう。

「あたしがもし光源氏だったら、相手が何人いても、そのときはそれぞれ、本気だったと思うんです」

「なるほど……」

俺は感心して頷いた。が、女の子が源氏物語を読んで、自分がもし光源氏だったら…なんて考えるものなの？

「でも現代人の価値観からいえば、平気で浮気するような男は、生きる価値なんかないんです」

おっかねー……。関西人がよく言う「死んだらええのに」って勢いかな。だけど、まあ、そうだよな。二股三股どころじゃないんだから。

でもなんか、話をしているうちに、少しずつ源氏物語の片鱗を思い出してきた。昔、疑問に思ったことがあるんだ。いろんな相手に魅力を感じて、衝動を抑えきれない、というのは理解できる。俺も男だし。

ただ、その人数の多さには、首を傾げざるを得ないんだよな。御簾越しに、文に焚き付けられた香の香りに惹かれて……って、それだけでそこまでするか？　いくらそういうことが認められてた時代とはいえ、大変なエネルギーだぞ。

俺が思うに、光源氏は病気だったんじゃないのかな。多情症とかそんな精神疾患、ありそうじゃない？

作者の紫式部は、そんなひとが身近にいたんじゃないのかな。そのひとをモデルにした可能性はある気がするなあ。

「でも、何度読んでも、よくわからないんです。その時代に生まれて、その時代の文化の中で育って、読んでみたかった物語ですね」

なんか、気合いのはいった意見だ。そういや碧は、酔っぱらうと歴女になるんだった。源氏物語も歴女の守備範囲なのかな。

「俺も、それぞれに真剣だったという意見は納得できるよ。男は馬鹿だから、その時々夢中になって、他のことは忘れてしまっし」

「おお、W松浦で揃えてきましたか」

さくらの台詞に、みんな吹き出した。俺と碧は苗字が同じ松浦だから、こんな指摘になるわけだ。

「でもやつぱり、藤壺じゃないかな。罪を背負ってでも望んだのは、藤壺だけみたいだし」

「ということは、副部長はマザコンですね」

「はあ？ 藤壺を選ぶとマザコンなの？」

「当然です」

「紫を選んでたら、なんて言われてたの？」

「もちろんロリコンです」

なんじゃそりゃ。

「……源氏物語についての討論だよね？ これ」

「副部長がマザコンかロリコンか、調査してたに決まってるじゃないですか」

なにを今更、と続いたさくらの言葉に、俺は後輩たちにかかわれていたのだと気がついた。

「やられた」

こめかみを抑える俺に、亜衣が笑いながら訊いてきた。

「……で、小学生の許嫁がいるって、本当なんですか？」

「……なんでそれを……？」

「さっき部長さんに、そんな話をしたんでしょ？ 伝言ゲームみたいに回ってきましたよ」

うーん……。部屋も広くはないし、声も絞ってなかったから、当然と言えば当然か。しかしこの話、ここにいる写真部全員に知れ渡ったということか。頭が痛いよ。

「わたし、副部長さんは柚希が本命かと思ってたんですけど……」

「亜衣ちゃん、君ねえ……」

「わたしも。瀬戸さんが副部長のモデルするって聞いたときは、てっきり口説き落とす魂胆かと思ったもん」

「さくらちゃんまで、なに言ってるんだよ」

柚希にモデルを頼んだときは、もう柚希が男だとわかっていたから、そんな下心は毛頭ありませんでした！

「あたしも思った」

とどめは碧か。『ブルータス、お前もか』と呟いたジュリアスシーザーの気持ちか、いまようやくわかったよ。

「碧さんまで……」

がつくり脱力してるのは、俺じゃなくて柚希だ。

「でもあたし、聞いたことあったでしょ。副部長とつきあってるの？ って」

「事実無根なんですから、忘れてください」

「一時、うちのブログでも話題になってたんですよ」

「亜衣ちゃんのブログに？　なんて？」

俺の問いかけに、心底愉しそうな様子の亜衣が説明してくれた。

「柚希がうちのブログにコメント書き込むとき、ハンドルネームが

『ユズ』なんで、読むひとが読んだらすぐわかるんです。で、『写真部の先輩とふたりでカラオケに行った』って書いたことがあって、みんなが推察してたんです。柚希のデートの相手は誰だろうって」

「すごい。瀬戸さん、やっぱり人気あるんだ」

「碧さん、怒るか妬くかしてください。無邪気に喜んでないで……」

「なんで？ モテるのカッコイイじゃん。それに、カラオケ行ったデートの相手、副部长でしょ。そのときモデル引き受けることになった、って言ってたじゃない。怒ったり妬いたりするようなことなの？」

「……いえ……」

柚希が溜め息をついた。

亜衣やさくらに同じことを言われてもまるで意に介さないのに、碧の言動にだけ敏感に反応しているのは、現在このふたりがつきあっているからだ。

揉めるだけ揉めて、学祭の最終日にまとまったから、まだつきあい始めて一週間の初々しいカップルである。どう見ても男女交際しているような絵柄には見えないけど。

碧に男だとばれてひと悶着の後、つきあうようになってから、柚希は自分の性別を周囲に隠していない。だから、写真部の部員は全員、柚希が男だということも碧とつきあっていることも知っている。柚希と碧のこんなやりとりも、珍しい光景ではなかった。

さくらの弁を借りるなら、世にも面白いカップルだ。

「副部长、マザコンはともかく、小学生は犯罪ですよ。ヘンタイで

すよ。人間失格ですよ。もう二十歳過ぎてるんですから、事件になったら全国に名前が公表されますよ」

さくらはときどき、刃物のように鋭いことを言う。

「……………肝に銘じるよ」

「松浦さん、熟女好きは個人の嗜好ですけど、不倫は犯罪ですよ」

柚希はときどき、……………以下同文。

「……………重ねて肝に銘じるよ」

家ではお袋にホモや不能の疑いをかけられ、コンパでは後輩にマザコンのお墨付きを頂戴し、ロリコンや不倫は犯罪だと釘を刺された。

……………なんて一日だ。

第四話

大迷惑な源氏物語（後書き）

第五話

婚約解消を申告するぞ

「母さん」

翌日、俺はお袋の顔を見るなり、眉を吊り上げた。
昨夜遅く帰ったときには、家族はみんな寝静まっていたし、朝、遅く起きたら親父と雄介はすでに出かけていた。
そんなわけで、俺の憤りの矛先はひたすらお袋だ。

「昨日の変な話は、冗談なんだろうね」

朝飯か昼飯かわからないような食事をかきこみながら、俺はお袋に抗議する。食べながらでは迫力はないが。
どうでもいいけど、この味噌汁、熱すぎるって。

「冗談なわけじゃないじゃない。本当よ」

「そんなあつさり言われても……」

「母さんだって、あんたと凜ちゃんが本当に結婚できるなんて思っ
てないわよ。でも、向ここの気持ちもわかるしねえ」

「ちょっと待って。じゃあ、許嫁の話を持って来たのは、向ここの
親なの？」

「そうよ」

「なんでまた？」

「事情があるのよ。うちも、老い先短い身の上なんだから、安心していのは一緒だし」

そこまで年寄りじゃねーだろーが。

都合がいい時だけ老け込んだ芝居するよな、このひと。

それにしても、凜の親は、なんだって近所の大学生と自分の娘を婚約させようなんて思ったのかな？

凜が俺と結婚したい、とでも言ったのかな。いや、絶対違うな。会うことも少ないし、昨日だって普通だったぞ。

俺より雄介の方がまだ……あ、そうか。雄介がいるじゃないか。

「母さん、俺じゃなくて雄介の方がいいじゃん。年も少しは近くなるし、勉強みてあげたりしてるんだろ？俺よりよっぽど、凜ちゃんだって懐いてるんじゃないの？」

「雄介じゃ、意味ないわよ。あんたじゃないと」

なんで？

このあとなんかその疑問をぶつけてみたが、お袋ははぐらかすばかりで、答えようとしなかった。

「とにかく、結婚相手は自分で探すから、ちゃんと断ってよ。凜ちゃんだって可哀想だろ」

「彼女、いないんでしょ」

「彼女はいなくても、好きな相手は……」

「いるの？」

いないけど、ここではないと言えば、話は戻ってしまうよなあ。

「いるいる」

「信じられないわ。家に連れて来たら信じるかもしれないけど」

適当に言つたと、薄々気づいたらしい。やはり鋭い。

「まあ、いいじゃない。凜ちゃんまだ若いんだし、いますぐどうこうなんて話じゃないんだから。気休めみたいなもんだと思いなさいよ」

気休めというより、気苦労でしかないんだけど……。だいたい、若いと言える年齢にすら達してないんだぞ、凜は。

変な婚約話は、どう転がしても暗礁に乗り上げてしまったようだ。

「ご馳走様」

俺は溜め息をつくとき、お袋に話をするのを諦めて、自分の部屋へ戻った。

第五話

婚約解消を申告するぞ（後書き）

第六話

美大の友人 1

部屋のベッドに腰かけて、俺は溜め息をついた。

どうもわからないことだらけだ。

だが、どうやらお袋は、なにがなんでも婚約……といった意気込みはなさそうだ。ならば、放っておいても問題はないのかな。

俺はカメラケースからカメラを取り出した。

大学に入ってから購入した一眼レフだ。デジタルカメラはどんな性能がよくなっていくが、いまの俺にはこのカメラで充分だ。

最近、まともな写真を撮ってなかった。カメラの電源を入れて、再生モードを起動する。液晶に表示された写真はどれも、学祭を撮影した記念写真だ。気持ちが入ってない写真だから、パソコンに転送もしないでそのままにしていたのだけど……。

俺はノートパソコンを立ちあげた。とりあえずデータを転送して、メモリを空にしておくことにした。

写真を撮りたい気持ちはある。

けれどいまは、心を揺さぶられる被写体に巡り合えない。

柚希を写したときは、心地よく高揚した。そして満足できるものが撮れた。いまは潮が引いたみたいに、空虚な気分だ。

「才能、ないんだろうなあ……」

写したい被写体が絞りきれないのも、方向を見極められない原因だ。人物、風景……、なにが自分を一番惹きつけるのか、いまだにわからないのが、もどかしい。

撮っても、撮っても目標が定まらないことこそ、才能がない証拠

のように思える。

佐々木や碧はちゃんと絞っているのが、少し悔しい。
写真に限らず、なにをしてもある程度のレベルには達するが、際
立つて才能を発揮することはない。

勉強も運動も、苦勞せずに及第点は取れるが、一番にはなれな
った。

自分で自分が物足りない。

爆発力は、どうすれば身に付くんだろう。

ふいに机の上に置いていた携帯の、着信音が鳴った。

開くと表示されている名前は、高校時代の友人、林原だ。

「林原？」

『よお、元気か？』

「先週、会ったばかりだろ」

『そうだったよな。M大祭、お疲れさん』

林原と最後に会ったのは、学祭だった。林原は、M大から車で二
十分くらい離れたところにある美大で、油絵を専攻している。俺た
ちの高校から美大に行くのは十年にひとり、いるかいなかの変わ
り種だ。

「いや、こちらこそ、来てくれてサンキユ」

『評判の名画は見逃せなかったからな。結構な人数引きつれて行っ
ちまって、迷惑かけなかったかな』

「全然。佐々木はお前が美大の油彩専攻だつて訊いて、恐縮してたけどな」

『ああ、あの、ゴツくて可愛い撮り鉄くんか。名画の責任者だったっけ？』

佐々木は鉄道マニアの撮り鉄だ。写真展の作品も電車の写真だったから、林原にはそう説明した。それを覚えていたらしい。

「そうだけど、佐々木って可愛いかな？」

『可愛いだろ。お前の言うこと、なんでも鵜呑みにしちゃうじゃないか』

「そりゃ、後輩だからな」

『いまどき、サークルの後輩が、そうそう上級生の言うこと訊いたりしないぞ』

へえ、そうかな。美大生はアクが強いだけじゃないのかな。

「それより、なんか用事だった？」

『ああ。実はあの作品が行き詰ってたよ。今夜、泊まりに来てくれない？』

なんだ、そういうことか。

林原はいま、なんとかいう展覧会に向けて、油絵を制作中なのだが、俺がその絵のモデルになっているのだ。

「いいよ」

『悪いな。何時くらいに来れる？』

「そうだな。七時でいいか？」

『オッケー、助かるよ。じゃ、待ってるから』

携帯を切って、俺はパソコンの画面に視線を戻した。たいした数でもなかった画像は、とっくに取り込み作業が終わっていた。

林原の絵は、あれからどんな変化を遂げているのだろう。
俺は、少しばかり浮足立った。

第六話

美大の友人

1（後書き）

第七話

美大の友人 2

築何十年だかは不明だが、いまどき、映画でも見かけないような昭和の木造住宅。そこは代々男子美大生がルームシェアしている広い敷地の一軒家だ。

雨戸が木製の引き戸だったり、縁側があったり、渡り廊下があったり、洗面所がタイル貼りだったり、俺たちの世代には、この家のそこかしこがカルチャーショックだ。

いろんな時代に何度モリフォームしたのか、部分的に現代的な所もあって、家自体がパッチワークのようだ。土間まであるから、最初に建てられたのは戦前なんじゃないのかな。

子どもの頃から住み慣れた家は、シンクに食洗機が備わっていて、床暖房があり、窓はペアガラスだ。

祖父母の家も似たようなものだから、こんな古い木造住宅を体験したことがない。なのはどうして、懐かしいと思うのだろうか。

そして俺は、なぜかこの家が妙に気に入っている。

林原のモデルを引き受けたのも、半分はこの家が目当てだった。ここに来るときは、必ずカメラを持参するのだから、我ながら正直すぎて呆れる。

ルームシェアは、それぞれ専攻で部屋が割り振られている。

一階は林原と日本画。二階は彫刻がひとりとデザインがふたりだ。油絵と日本画は部屋で絵を描くから、でかいキャンバスを二階に運べないのだ。

林原の部屋のふすまを開けた途端、テレピンオイルの匂いに蒸せそうになった。

石油ストーブで部屋が暖まっているから、余計に匂いが強烈なよ

うだ。

「よお、急に無理いつて、悪かったな」

「家にいても退屈だから、いいよ」

林原の油絵は、最後に見たときより、かなり進んでいた。

俺には、その絵がなぜ行き詰っているのか、さっぱりわからない。

「もう、完成じゃないのか？」

「まだだよ。弾けた感覚がないから」

林原はよく、こんなことを言う。絵の具を重ねて重ねて、仕上がってはいくんだけど、靄^{もや}がかかっているときはまだ、筆を置けないそうだ。あるとき突然、頭の中で弾けたような感覚が起こって、そこから急に自分の表現したかった絵が、形になっていくのだという。

写真は、シャッターを押せばそれ以上できることはない。

シャッターを押すまでの知識と感性がモノを言う。

俺には絵心がないから、林原の言っていることが、すべては理解できないけど、妙に羨ましい気分になる。

「すぐ描き始める？」

絵の中の俺は、上半身裸で背中を向けている。すぐ描くなら、脱がなきゃいけないから訊いたのだ。

「いや。ちよつとしてからにする」

このちよつとしてからが、三十分のときもあれば、三時間のときもある。ならば、二時間半後に来ればよかったんじゃないかと訊くと、筆で描いてないときも気持ちで描いているから必要な時間だそううだ。

絵と写真はまったく違うけど、そういう感覚は共感できるから、甘んじて受け入れてはいるけどさ。

いつも座る場所に胡坐を組んで腰を下ろす。

林原が淹れてくれたコーヒーを受け取った。淹れてくれたといっても、カップにインスタントコーヒーを適当に放り込んで、石油ストーブの上に乗せたやかんからお湯を注いだだけのものなんだけど、ジーンズに着古したトレーナー。そして元の色がわからないほど絵の具で汚れたエプロン。これが、この部屋で絵を描くときの、林原のスタイルだ。

高校のときは、俺と似たようなカテゴリーに入る外見だった。やや長身で細身。目立って違反することはしないが、優等生でもない、どこにでもいる普通の高校生ってカテゴリーだ。

だが、大学に来てから林原は男臭さを増した。体型に変化はないが、攻撃的な印象になったのかも。

俺は相変わらず守りの印象が強いんだよな。身近な友人の成長や変化は、頼もしくもあり、寂しくもある。そしてなにより、羨ましい。

しばらく、お互いの近況を報告し合っていると、ふいに林原が躊躇いがちに「あいな」と改まった口調になった。

「こないだ、武智^{たけち}から電話がかかってきた」

武智も林原同様、高校の同級生だ。高校時代は三人でよくつるんでいたが、武智は地方の大学に進学したので、最近は疎遠になって

いた。

「へえ、あいつ、元気にしてた？」

「元気は元気だったけど、大学、中退したって」

「ええ？　なんで？」

あと一年ちよつとで卒業できるのに、どうしたんだろう。

「あのさ、これは武智からお前に言ってくれて頼まれたんだけど……」

林原は言いにくそうに言葉を詰まらせると、煙草に火を点けた。

「…驚くなよ」

「なんだよ」

「武智、性同一性障害だったんだって」

「は？」

「家族と縁切られて、いま女装して、その手の店で働いてるそうだし……」

俺は言葉を失った。

ストープの上のやかんが、しゅんしゅんと音を立てていた。林原が吐く煙草の煙が揺れるのを見て、はっと我に返った。

「……でも、でもあいつ、そんなそぶり、全然なかったぞ。むしろ、俺らより男らしかったじゃないか」

どうにか、気を取り直して疑問をぶつける。林原の口調からは冗談とも思えなかった。それでも、冗談だよと笑い飛ばしてほしい気持ちでいっぱいだった。

「うん。でも、高校のとき、男としてふるまうのが辛かったって」

そうだったのか。全然、気がつかなかった。

運動神経が良くて、体格も男らしいやつだったけど……。でも考えたら、武智は誰ともつきあったことなかったし、その手の話に混ざることなかったな。

硬派だと女の子からモテたのに、なんで、どうして、と頭の中がグルグルする。

俺は頭を掻き毟って、ぬるくなったコーヒーを喉に流し込んだ。こんなときは、酒でも飲みたいよ。でもこのあと、モデルのお勤めがあるしなあ。

正直、武智が女装しても全然似合わない。不気味になるばかりだろう。俺は溜め息をついて肩を落とした。

「あいつ、本当はお前に訊いてもらいたかったみたいなんだよ」

俺もそれは疑問だ。武智は林原よりむしろ、俺と気が合ってたはずなのに。

「惣介は頭が固いから、言いだせなかったみたいだぜ」

「うーん、俺って頭、固いかな？」

「そうだな。なんていうか、まっすぐだろ。常識的だし」

常識的っていったって、そんなの誰でもそうなんじゃないのか。

「でもまあ、俺より林原の方が告白しやすかったんなら、そうかもな」

林原はおおらかだ。

美大に行ってるだけあって、柔軟性に富んでるし。なんでも受け止めてくれそうな、度量の広さを感じるよ。大雑把ともいうけど。だけど俺だって、高校時代の友人からカミングアウトされたからって、「うわ、気持ち悪い」なんてことを思うつもりは、毛頭ないんだけどな。理解はできなくても、話を訊いてやって、励ますくらいならできるのに。

「林原が訊いてやったんなら、それでいいさ。武智、どんな感じだった？」

「やっと楽になったって言ってたよ」

「そうか。なら、よかった。あいつもこれからが大変だろうな。しかし、案外多いんだな」

「なにが？」

「性同一性障害。写真部の後輩にもひとりいるんだよ」

「マジで？」

「うん」

「もしかして、あいつか？ 名画の責任者の……？」

「佐々木じゃないよ」

武智とイメージが重なるから、そう思ったのかな。武智は佐々木ほど熊じゃないのに。

「毎日、女装して大学来てる」

「すごいな。問題とか起きないわけ？」

「うん。ていうか、女にしか見えないんだよ、その子の場合」

「へえ。じゃあ、手術済みとか？」

「手術はしてない。夏に話したときは、来年、手術して戸籍も変更するって言ってたけど、やめるみたいだ」

「なんで？」

「彼女ができたから」

「は？ 性同一性障害で、女装してて、彼女できんの？」

林原は短くなった煙草を灰皿に押し付けると、驚いた声をあげた。

「相当、すったもんだしてたけどな」

「そりやそうだろ。しかし、そんなややこしいやつに彼女ができて、なんで俺には回ってこないんだよ」

嘆く気持ちはわからなくない。俺も最近はシングルだし。

「なあ、女にしか見えないって、どんな感じ？」

「どんなと訊かれても、難しいな。あ、お前、見たことあるよ」

「いつ？ 学祭？」

「ああ」

頷く俺に、林原は首を傾げた。

「俺、写真部の部員、紹介してもらったの、あいつだけだぞ」

「直接会ったんじゃないよ。写真展、来ただろ」

「そりやもちろん」

「俺の写真、覚えてる？」

「そりやもちろん……お、おい、まさか……？」

「あの写真のモデルが、その子だよ」

「マジかよ、ありえねえって」

林原は目を丸くして呆然としている。

「だよな。俺もまだ、たまに混乱してるよ」

「てつきりプロのモデルか、グラビアアイドルかと思った」

「学生がどうやってプロのモデルを雇えるんだよ」

俺は苦笑して肩を竦めた。

「あれだけ可愛い子をあんな風に写して、惚れてしまいそうにならないのか？」

「可愛くても男だぞ。どうやって惚れるんだ？」

「惣介、お前、本当にまっすぐだな。潔癖症か？」

「なに言ってるんだよ。普通だろ」

「うーん、あ、そうだ。日本画の女子が話してたことでためしてるよ」

「なにそれ？」

「もし世界に人間が自分を含めて三人だけだったら、という過程なんだ」

「ふうん。女の子が好きそうな話だな」

「ひとりには醜い老女。もうひとりは美少年。どちらかを恋愛相手に

選ばなきゃ死ぬとしたら、どっちを選ぶ？」

「？ 老女だろ？ 美少年を選ぶ奴なんかいるのか？」

「オレは美少年だぞ」

「ええ？ なんで？ 友達ならわかるけど、恋愛相手だろ？」

恋愛の対象を選ぶなら、年齢や容姿や性格以前に、まずは女でなければ話にならないではないか。もちろん、世の中に同性愛者がいることは知っているが、それはごく稀な人たちだけのことであって、俺らみたいな人間とは、縁のない話だと思っていた。

「オレは綺麗な方がいい。ちなみに、日本画の女子でこの質問をしたんだって。老女を老人に、美少年を美少女に替えて。そしたら、美少女を選ぶ子の方が、はるかに多かったらしいぞ」

「マジで？ あ、でも、美大だからじゃないの？」

美を追求する学生なら、美しさに比重を置くのかな。

「日本画の女子は、美大の中でも、かなりまともなんだぞ」

じゃあ他の専攻はどうなんだよ、怖ろしいな。

「でもそう思うなら、経済学部で訊いてみる」

「全員、俺と同じだと思うけどな……」

「どうかな。さてと、そろそろ、描いてもいいか？」

「俺はいつでもいいぞ」

「じゃ、脱いで」

「襲うなよ」

さっきまでの話が話なので、俺はふざけて言った。

「もうちょっと美少年だったらよかったんだけど、惜しいな」

林原もノリがいい。

「失礼だな。俺のどこが美少年じゃないんだよ」

切り返しながらも、可笑しくて笑いが止まらない。

「惣介は美少年というより、好青年だから、色気はないんだよな」

林原は小首を傾げながら、ぼそりと呟いた。

不本意だと文句を言いながら、このセリフを篠崎部長や佐々木が訊いたら、大笑いしながら頷くんじゃないかと思えて、ちよつと虚しかった。

一端、キャンバスに向かうと、林原の集中力は半端じゃなかった。ひとが変わったように真剣な表情になる。

絵はすでに、かなり描き込んであるので、モデルといっても最初の頃のような、長い時間動けないわけではなく、イメージを再確認しているようだった。

しばらく俺の背中を睨みつけていたかと思うと、キャンバスに向かつて唸ってみたりする。なかなか筆は進まないようだった。

そんなことを繰り返しているうち、林原は、突然描き始めた。

モデルは休憩していい、しばらくしたらまた頼むと言われたから、俺は服を着て、絵の後ろに回った。

林原の絵は、具象とも抽象ともいえるような、曖昧な表現だ。だからこそ、描いている最中なのに、モデルを続ける必要がないのだろう。

絵の良し悪しはわからないから、口は出さない。

だけど、煙草をくわえながら筆を持つ横顔は、俺が知る林原の姿の中で、一番輝いている顔だ。

俺は、持って来たカメラで、その姿を収めた。

集中した林原が、シャッター音に反応しないのは、いつものことだった。この家が火事になっても気がつかないのではないか、と思うような情熱だ。

俺にないのは、こんな激しさなんだろうな。男として、置いて行かれていような寂しさを感じた。

武智はどうだったんだろう。

俺や林原と一緒にいて、疎外感を味わってきたんだろうか。

俺は、高校時代の精悍だった武智を思い出した。もう二度と、あの姿で会えることはないのかな。

そう思うと、大切な友人をひとり失ったような寂寥感が込み上げた。

第七話

美大の友人 2（後書き）

第八話

写真部の非凡なる後輩たち

ゼミが終わって部室に行くと、最近おなじみのメンバーが机を囲んでいた。

佐々木や碧、それに柚希は、もともと写真部の活動も熱心だったけど、さくらはこのところ、意外に頑張っている。

さくらは去年、学祭の名画を手伝っているうちに写真部に入部したのだが、そのあとはコンパくらいにしか顔を出していなかった。今年は個人写真も出品したし、ちよつとやる気になってるのかな。

「うわっ、副部長、なんか顔、汚くないですか？」

さくらに容赦のない指摘をされて、俺は自分の顔をなでた。口の上と顎に少しざらついた感触がある。

「そっぴや、三日…いや、四日くらい、髭、剃ってないな」

「やだな。横着しないでくださいよ。似合わないんだから」

無精ひげが似合う奴なんか……いるか。林原なんかちよつとそんな感じだし、佐々木も似合いそうだな。でも、佐々木が髭を伸ばしたら、おっさんになりそうだ。

俺はもともと髭が薄いから、毎日剃ったりはしないんだけど、さすがに四日目になると目立ってくるか。

「昨日は友達の家泊まったから、剃れなかったんだよ」

「部長のアパートっすか？」

佐々木の問いに、俺は首を振った。

「いや、美大の友達。ああ、そうだ。佐々木によろしくって言うってたぞ。あいつ、お前のこと、気に入ったみたいだな」

「油絵の林原さん？」

「ああ」

「泊まりにいたりするほど、仲良かったんすか？」

「高校の同級生だからな。でも昨日は遊びに行っただんじゃなくて、絵のモデルに行ったんだ」

「へー。松浦さんがモデル……。想像できるような、出来ないような。油絵のモデルって、脱ぐんすか？」

「脱ぐよ」

「きゃー、エロいー！」

さくらがふざけてはしゃいだ。この子は、いちいち反応が激しいよな。

「期待を裏切って悪いけど、上半身だけだから」

「なんだ。つまんない」

「つまなくて、悪かったね。林原が言うには、俺の背中主張し

過ぎなくて、いま描いてる絵にちょうどいいらしいよ」

部員が一齐に、どっと笑った。

そんなに面白かったか？ いまの。

「こんにちは。あ、なんか盛り上がってる」

ノックの音と共に、部室のドアから入ってきたのは亜衣だ。最近よく、写真部の部室を訪れる。

さくらと碧は、いつそのこと写真部に入ったらいいのに、と説得しているようだが、写真は携帯でしか撮らないからと、入部は断っている。

「いつもお邪魔してるんで、お菓子持ってきました」

見れば、亜衣の手には紙袋があった。

「亜衣ちゃんの手作りクッキー？」

碧が尋ねると、亜衣は驚いたように頷いた。

「どうしてわかるんですか？」

「昨日、亜衣ちゃんのブログに、最近お菓子作りにはまってる、って書いてあったし。クッキーを試行錯誤中なんですよ？」

「そうなんです。ブログってやりだすと楽しいんですけど、私生活がバレバレになりますね」

さくらと碧がお茶の準備を始めた。最近、写真部の部室は、こんな感じで穏やかだ。めばしい活動予定もないから、休息中だな。写真部の部室は、広さが二十畳くらいだろうか。壁のコルクボードには、部員が撮った写真が重なり合うように貼りつけてある。奥まった一角が暗室になっていて、白黒のフィルム写真を現像することができる。水道もあって、何年か前の卒業生が湯沸かしポットを置いていたので、部室とは名ばかりのお茶会ルームのような場所になっていた。

もともと、写真を撮るときに部室で撮ることは稀だし、佐々木や碧は鉄道だの景色を撮るから、本当に活動しているときは外に出て行ってる。

ここに集まっているときは、情報交換だったり充電してるときだから、この状況も当然ではあるのだ。

この部室が写真部らしい活気で溢れるのは、学祭の準備のときくらいだ。

「さっき、なんか盛り上がってました？」

「そうなの。訊いてよ、亜衣ちゃん。副部長がね、ヌードモデルしてるんだって」

「ええ？　すごい……んですか、それ？」

「さくらちゃん君の言葉じゃ説明不足だろ。美大の友達に頼まれてモデルになってるんだよ」

「ああ、そうだったんですか」

「副部長の背中が頼りなくて、ちょうどいいんだって」

「頼りなくて、なんて言われてないって。主張し過ぎなくて、だよ」

「どっちでも一緒じゃん」

さくらがぼそりと呟くと、また一斉に笑い転げた。どうもこないだから、笑われてばかりだ。

「でも、副部長さんって、脱いでもあんまり色気とかなさそうですよね」

「男に色気なんかあるの？」

「ありますよ。もちろん」

「うーん、そういえば、林原にも言われたよ。『惣介は美少年と言っより好青年だから、色気はない』って」

「完璧な表現ですね。さすが美大生」

部員全員に大きく頷かれて、さすがに俺は落ち込みそうになった。

第八話

写真部の非凡なる後輩たち（後書き）

正直、毎日の更新が苦しめです。

話もそうなんですけど、サブタイトルが（笑）

このシーンは、まだ途中なので、明日も更新します。

第九話

碧の胸の触り心地

「色気云々でいうと、この中じゃ碧だよね」

「あ、納得です」

「あたし？　なんで？」

さくらの意見に亜衣が同意するのを見て、碧自身、驚いていたが、俺もびつくりした。いまいる女の子の中では、一番、幼いイメージがあるからだ。

佐々木も腑に落ちない様子で、クッキーを齧りながら首を傾げている。

「胸がそそるんだよね、碧って」

「わかります」

「見たことあるの？」

「泊まりに来てもらったとき、下着姿を披露してもらいました」

柚希がコーヒーを吹き出しそうになって咳き込んだ。

「瀬戸さん、大丈夫？」

碧が驚いて柚希に顔を寄せている。柚希がどうして吹き出したか、わかってないんだろうな、あれは。

碧はちゃんと言われないとわからないタイプだし、柚希は言いにくいとも言わずに飲み込んでしまう性格だ。このふたり、冷静に考えると相性悪いんじゃないのか？

「はい、一応……」

しかし、柚希も案外余裕がないな。恋人が同性の後輩の家に泊まりに行ったり下着姿を見せるくらい、どうってことないと思うんだけど。

「触ったことある？」

「いえ、それはさすがに」

さくらと亜衣は、柚希の挙動不審な様子なんか、気にもしてないらしい。

「触ってみて、触ってみて」

「碧先輩、触ってもいいですか？」

「べつに、いいけど……」

碧の隣で、柚希が複雑きわまりない顔をしている。もし俺が碧の彼氏だったとしても、この状況に置かれたらこんな顔をするしかないんだろうな。

「うわあ、ほんとだ。なんか凄く色っぽい触り心地」

「でしょ」

さくらが自分の胸のように、自慢げに頷いている。

「ええ？　なんで？　みんなと違うの、あたし？」

「違いますよ。ほら」

亜衣が碧の手を取って自分の胸に触らせた。高校のときはクラスの女子がよくこんなことしてたけど、間近で見るのは初めてだ。俺も佐々木も、眼中にないか、男としてカウントされてないんだろうか。

「亜衣ちゃんの方が大きいし、色気あるよ」

「大きさはなくて触り心地だよ。わたしと碧の方がわかるのかな」

さくらが亜衣と交代した。碧は自分とさくらを触り比べて首を傾げている。

ふと佐々木に視線を移すと、時刻表を顔の前で握りしめて黙り込んでいた。どんな顔をしているのかは時刻表で隠れて見えないけど、耳が真っ赤になっていた。

そういえばこいつは、高校が男子校だったっけ。こんな女の子の戯れ程度でも、興奮したりするんだろうか。ゴツイ身体に似合わず純情なやつだ。

「うーん、違うけど、単なる個人差じゃないの？」

碧はまだ首を傾げていた。

「自分じゃわかんないのかな。ね、瀬戸さん、違うよね」

さくらが柚希の両手を取って、自分と碧の胸に押し当てた。

「あ」

「あ」

「あ」

部屋に一瞬、なんとも言えない沈黙が流れた。

「こ、小畑さん……なにするんですかつ！」

慌てて手を引いた柚希が、激しく動揺している。普段あまり取り乱したりしないから、こんな様子は珍しい。

「……あ、いま、ガチで忘れてた。ごめん、ごめん」

さくらが舌を出して謝罪しているけど、さほど反省しているようには見えない。

俺は思わず派手に吹き出した。

「松浦さんっ」

柚希が唇を尖らせて睨みつけてくるけど、でもちよつと笑えるよなあ。普通の男だったらラッキーって感じだけど、柚希には違っていたいだ。

「悪い、悪い。でもなんていうか…大変だな。同情するよ」

性別を忘れられるとは、面白すぎる。腹が痛いよ。

柚希は、まだなにか言いたそうにむくれた顔を向けてくる。男とわかっていても、こんな表情を見ると、やっぱり可愛いと思ってしまっただけだな。

「あの… すいません、碧さん……」

柚希が碧に頭を下げている。不可抗力とはいえ、彼女の目の前で他の女の子の胸に触ってしまったからだろうけど、真面目だ。

「大丈夫？ セクハラされたんだから、ちゃんとさくらに怒った方がいいよ」

「はあ……。あの、碧さん、怒ってません？」

「なんであたしが瀬戸さんに怒るの？」

「いえ、なんでもないです……」

このふたりは恋人同士なんだよな。妙に会話がちぐはぐなんだけど、柚希が性同一性障害だったからなのか、碧の破天荒な個性に起因しているのか、どちらなんだろう。

「ほんと、ごめんって。うっかりしてた」

自分のせいとはいえ、胸に触られた女の子が触った男に謝罪するのも珍しい。

「さくらさん。しょうがないですよ。柚希のこの有り様じゃ、忘れます」

亜衣が涙を流さんばかりに笑いながら、さくらをフォローする。

「そうだよねえ」

「みんなはまだ短いからいいけど、わたしなんか六年も柚希を女として扱ってましたから、今更、性転換されても……って感じですよ」

性転換って、亜衣からしたら、柚希が手術を踏みとどまったのは、性転換になるのか？　なんかややこしいな。

俺は、柚希の顔を見つめた。

存在そのものが神秘的って感じなんだけど、話してみれば、わりと普通で、むしろ地味な性格の大学生だったりする。ただ、中学の時に性同一性障害と診断されたのに、女の子と恋愛して、それでも見た目が男っぽくならないのは、どうなってるんだろう、とは思う。女装に関しては、恋人の碧が「せっかく可愛いんだから」と推奨しているらしいのだが……。

武智もこんな外見に生まれてくれば、苦労することもなかったのかな。

うーん、普通の俺には、普通じゃない人たちの平和がどこにあるのかなんて、わかるはずもないか。

「松浦さん？」

あんまりじろじろ見ていたら、柚希が不審そうにしていた。

「いや、俺って、まっすぐに常識的かな？」

「は？」

「昨日友人にそう言われたのを思い出したんだ」

「松浦さんは、まっすぐに常識的だと思いますよ。なにか疑問の余地でもあるんですか？」

「なんかさ、世界にもし、自分を含めて三人しかいなかったら……って過程の話なんだって」

俺は昨日、林原から訊いたことを、みんなに話した。

「そんな選択で迷うひといるの？」

さくらが首を傾げた。

「美少女だよね」

「ですよね」

さくらと亜衣が頷き合った。

「ええ？ 本当に？」

「副部長、まさか醜い老女なんですか？」

「いやだって、そりゃあ……あ、碧ちゃんは？」

「美少女です」

うーん……いや待て。碧は柚希を女だと思っていたときから不穩

な恋心を抱いていたから、参考にはならないんだ。

「佐々木は？」

「そうっすねー。難しいですけど、どっちかと言えば、老女……かなあ」

そんなに悩むことなのか？ 佐々木でも？

「副部長、筋金入りのマザコンですね」

「老女も熟女に入るの？」

「熟女の賞味期限って、何歳までなんですか？」

さくらと碧と亜衣の追い討ちに、俺は叫び出しそうになった。

俺の方が普通じゃないのかーッ！

第九話

碧の胸の触り心地（後書き）

皆既月食のため、遅い時間の更新です。9時半くらいまでは雨が降ってたんですが、11時前に晴れて赤い月を見られました。

いかかわしいサブタイトルになってしまいましたが、コメディイ度の高いお話だと思ってます。私的には。部室の話は楽しんで書いてます。恋を感じるときはシリアスだったのに、同じメンバーでコメディイを書く暴挙ですが（笑）

第十話

凜を迎えに行って、それから……

「ただいまー」

その日、俺が帰宅したのは、夜七時半を過ぎた頃だった。

「惣介、いいときに帰ってきてくれたわ。いまから車で文化会館に行ってきた」

お袋がパタパタと玄関に出てきた。

「文化会館？ 図書館の隣の？」

「そう、そう」

「なんで？」

「庄野さん、仕事が終われないらしいの。凜ちゃん、大人が迎えに行かないと帰れないのよ」

「なんかよくわからないけど、文化会館に凜ちゃんを迎えに行けばいいんだな」

「そうなの。お願い」

「わかった。行ってくる」

「あ、ちょっと待って」

お袋は慌ててリビングに引き返すと、小さなメモを手に戻ってきた。

「これ、凜ちゃんがいま持ってる携帯の番号。もし、会館まで行って見つからなかったら、電話してみて」

「わかった」

メモを受け取って、俺は玄関のドアノブに手をかけた。

「安全運転で帰ってきてよ」

「わかってるって」

お袋の心配性も久しぶりだな。よその子どもを車に乗せて帰るんだから、無理もないか。

俺は苦笑してポケットから車のキーを取り出した。

文化会館の駐車場に車を停めて、会館の入り口の前まで来ると、凜が俺に気がついて駆け寄ってきた。

「惣介くん」

嬉しそうな笑顔で首に飛びついてくる。

「来てくれてありがとう」

「俺が来るの、わかってたの？」

「おばさんから電話してもらったから」

ジャージ姿の凜は、見慣れない髪型をしていた。

括っているわけでもないし、どうなっているんだろう。毛先が全然見えない。いつもは額ひたいに下りている前髪も上がってるし。おでこが見えている顔もなんだか新鮮で、思わず見入った。

文化会館のホールに、凜と同じような髪型の女の子が何人かいるのが見えた。

体操やシンクロの女子選手が、こんなぺたりした髪型でいるのを、テレビで見た気がするけど……。

「凜ちゃん、今日のこれ、なんなの？」

「月曜日と木曜日はバレエだよ」

習い事の迎えに来たのか、俺は。お袋は最低限の説明すらしてくれなかったんだな。凜がバレエを習ってるのも、初耳だぞ。

「先生と友達に挨拶してくる」

「凜ちゃん、俺も行くよ」

別に凜が言えば必要ないと思うけど、万が一にも、怪しい若い男が教え子を連れ去ったと誤解されても困る。

俺は足早に凜の背中を追いかけた。先生とおぼしきひとの前まで行き、頭を下げる。

「いつも凜がお世話になってます。庄野さんが来られなかったので代わりに迎えに来ました。斜向はすむかいに住んでる松浦です」

「あら、わざわざご丁寧に。凜ちゃんをよろしくお願いします。気を付けて帰ってください」

「はい。ではお先に失礼します」

バレエの先生だけあって、首やら肩が恐ろしく細いな。なに食べて生きてるんだろう。柚希や碧も痩せてるけど、種類が違う感じだ。俺はもう一度軽く頭を下げて、凜に視線を戻した。凜はなんだかぼんやりしている。

「凜ちゃん？」

どうしたんだろう。俺は凜の頬に指を滑らせた。弾かれたように、凜は飛び上がった。

「惣介くんっ」

「あ、ごめん。びつくりさせた？ ぼうつとしてるから熱でもあるのかと思っただけど……」

なんか顔、ちょっと赤いかな。

「大丈夫？」

額に手のひらを当ててみる。熱はないみたいだな。顔が赤いのは、練習の後だからかな。

「だ、大丈夫だから。本当になんでもないから」

凜の顔は、また赤くなつたみたいだった。

逃げ出すように先を歩く凜の後ろ姿を、俺はぼんやり眺めた。後頭部で丸くまとめた黒髪が可愛かった。駐車場の頼りない外灯に照らされたうなじが、やけに女らしく目に移った。

助手席に座った凜は、少しうなだれてぼそりと呟いた。

「ごめんなさい」

「え？」

「せっかく迎えに来てもらったのに、なんか……」

さっき振り払うような態度を取ったことを、気にしているのだろうか。

「なんとも思つてないよ」

「ほんと？」

「本当だよ。それより、いつもこんな時間までバレエの練習、あるの？」

「うん。それに来月、発表会だから」

「なにか踊るの？」

「中国」

「中国？」

「くるみ割り人形の中国」

「そうか。大変なんだね」

くるみ割り人形の中国と訊いても、なんのことやらさっぱりわからなかった。大学生でも小学生よりわからないことがあるんだな。あたりまえか。

しばらく車を走らせると、大通りに面した信号に引っかかった。間が悪い。この信号、長いんだよな。うんざりした気分を持て余し、隣に視線を移した。

凜は靴を脱いだ片足を座席に乗せあげて、つま先を触っていた。バレエのタイツは、履いたまま爪先の部分だけ出せるようになってるらしい。以前つきあっていた彼女が履いてたパンストなんかとは、ずいぶん形状が違うようだ。

なにをしているんだろうと見つめていたら、足の指は白いテープまみれだった。凜はそのテープを外そうとしていた。

「凜ちゃんっ」

「え？ あ、あの、ゴミは持って帰るよ。車、汚したりしないから」

「そうじゃなくて、怪我してるのか？」

「ううん。マメは出来かけてるけど怪我はしてないよ。トウシューズでマメがつぶれると痛いからテーピングしてるの」

テーパーピング……。なんだそうか、びつくりした。

サッカーや野球のテーパーピングと、似たようなものかな。とにかく、怪我じゃないならよかった。

ほっとした心地で、凜の仕草を見守った。慣れた手つきで、足の指からテープを外していく姿に、俺は胸がざわめいた。真剣な横顔を、ジャージに包まれた華奢な身体を、バレエのタイツから露出したテーパーピングの足を、カメラに収めたい衝動に駆られた。

「惣介くん、信号、青だよ」

凜の声と後ろの車が鳴らすクラクションが同時に聞こえて、俺は我に返った。この信号は、こんなに短かっただろうか、舌打ちしたい気分だった。

もつと凜を、見つめていたかった。

いま押し寄せた衝動が、大切なもののようにも、後ろめたいもののようにも思えて、俺はひどく戸惑った。

家に着くと、車の音に気付いたのか、凜の母親が慌ただしく出てきた。

「惣介くん、ごめんね。本当に助かったわ、ありがとう。急患が入って看護師が足りなくなったから、凜を迎えに行く時間に帰れなくて」

「いえ、大丈夫です」

恐縮する凜の母親に、俺は訊きたいことが山程あったけど、凜のいるところでは訊きにくいよな。こんなに近くに住んでいるのに、

会えそうで会えない人だから困る。

晩飯を済ませて風呂から上がり、首に掛けたタオルで髪を拭きながら、俺は机の上のメモ用紙を見つめた。お袋に手渡された小さなメモだ。

携帯の番号が記されている。

凧が小学生であることを考えれば、この番号の携帯が凧のものとは思えない。お袋が言ったのは『いま凧ちゃんが持つてる携帯』だった。

習い事するときだけ、だれかの携帯を借りているのかな。だれかのといつても、家族に決まっている。でも、父親にしても母親にしても、仕事をしているのに一日携帯を手放すのは不便だろう。とすると、この番号の携帯は凧のもので、普段は持ち歩かないけど、習い事的时候は持つていく、と考えていいんじゃないのかな。

俺は散々迷った挙句、メモの番号を携帯のアドレスに登録した。

「もしかしたら、またこんなことがあるかもしれないし……」

だれもいない自分の部屋で言い訳しながら、俺はなんだか、ひどく悪いことをしている気分だった。

第十話

凜を迎えに行つて、それから……（後書き）

心が動くときの話は、書いていて落ち着かない気持ちになります。本当はもっと書き込みたかったのですが、恋愛度数を下けたかったのであつさりめに。11歳の子ども相手に本気になられても……てなもんですが（笑）

活動報告に今後の予定を書きました。

第十一話

元カノのアパートから朝帰り

煙草の匂いで、俺は目が覚めた。

目覚めて最初に目に入った物は、元カノのアパートの天井だった。

「おはよ。起こしちゃった？」

「いや……」

俺は派手に欠伸をかましながら、首を振った。

昨夜抱いたひとが、すでに服を身に着けていたので、俺は少し寂しい気持ちになった。暖房で暖められた部屋でも、裸のままでは寒い。ベッドのわきに置いてある服を拾い上げて、思い切り腕を伸ばした。背中がギクシャクする。

眠れないほど知らないベッドでもなく、ぐっすり眠れるほど慣れたベッドでもない。いま朝の挨拶をしてくれたひとに、少し似ている。

「なにか、食べる？」

「いいよ。忙しいの？」

煙草を口にくわえながら、スケッチにパステルを走らせている背中に見えた。

「忙しいわけじゃないんだけど、次のラフのラフかな」

春までつきあっていた彼女は、林原と同じ美大で助手をしている。

別れていた間に誕生日が過ぎたから、いま二十九だ。

一度別れて偶然再会してから、『こんな呼び出し』はたまにある。お互い、嫌いで別れたわけじゃないし、好きな相手もないから、なんとなく、だ。おかしい関係だと思うけど。

「中江さん、彼氏、できないの？」

つきあっていたときは、八歳年上でも名前で呼び捨てにしていたが、いまは苗字で呼んでいる。そんな呼び方にも、最近は慣れていた。

「できないわねえ。私、自分を優先しちゃうからなあ」

「そこがカッコいいのに。みんな見る目ないな」

「より戻したいくらい？」

「いや、それは……」

俺は、スケッチに視線を落としたままの中江の背中に、違和感を覚えた。

「俺、もうここに来ない方がいいんじゃないの？」

「どうして？」

「俺とこんなこと続けてたら、彼氏、作りにくいだよ」

「惣介って、優しいのか残酷なのか、わからないようなところ、あるよね」

残酷？ 俺が？ なんて？ 首を傾げて不思議そうな顔をしていると、中江はくすりと笑った。

「あなた、だれにでも優しいでしょ。それが恋人にとっては微妙なのよ。私はもう彼女じゃないから気楽に癒してもらってるけど」

中江の言い方だと、別れた原因は俺にあるみたいだ。少なくとも、彼女はそう言いたいのかな。

「そうねえ、たとえば、私が妊娠したって言ったら、惣介は責任とって結婚するでしょ」

俺はぎょつとして中江の顔を見つめた。

「馬鹿ね、たとえばよ。妊娠なんかしてないわ」

彼女がなにを言いたいのか測り兼ねたが、俺はとりあえず頷いた。

「結婚したら、浮気もせずに一生、仲良く過ごす努力を続けそうじゃない。でもそれが私じゃなくて他の誰かでも、同じだろうなあって思うのよ。惣介の残酷さはそこかな」

俺には、中江の言葉の意味が、よくわからなかった。普通、自分のせいで妊娠させたら結婚するだろうし、結婚したら幸せにしたいと願うものなんじゃないのかな。

そのどこが残酷なのだろう。そんなことを言いだしたら、世の中のできちゃった結婚は、すべて残酷ということになる。

けれど俺は、ふいに思い出した。相手がだれでも同じだろうと、

お袋にも言われたことを。

俺は、お袋と元カノに同じ評価を下されてるのか？

最近、俺が思う『普通』はことごとく否定されている気がするよ。

「恋愛はね、理性が働いてるうちは、まだまだ本気じゃないのよ」

「俺、中江さんに本気じゃなかった？」

「そうね。まだ余力がありそうだったわよ。でも私も自分勝手だし、本気で来られたらつきあえなかったから、合わせてもらえてありがたかったわ」

けれど、結局別れてるんだよな。よくわからないよ。なにが良かったのか、なにが悪かったのかも。

しばらくとりとめのないことを話したり、スケッチするのを眺めて過ごした。

帰りかけたとき、机の端に文庫本が置いてあるのに気がついた。なんの気なしに手に取って表紙を見る。

「へえ、源氏物語なんか読んでるんだ」

俺が以前、古典対策で読んで途中で挫折した源氏物語は、もっと分厚いハードカバーだった。こんな読みやすい文庫本もあったのか。

「読むなら持つて帰る？ もう読み終わったからいいわよ」

「うーん、読み切る自信、ないなあ」

俺は、打ち上げコンパで後輩にからかわれたときのことを思い出した。

「中江さん、光源氏の最初の妻ってだれ？」

「葵の上よ」

「葵の上……あおいのうえ……あおい……碧……あ、そうか。碧ちゃんか！」

柚希はあのととき、正々堂々と惚気ていたのか。いや、口説いていたのかな。もしくは、プロポーズだったりして。いくらなんでも、それは飛躍し過ぎか。

あのととき碧は、そわそわと落ち着かない様子でビールを口に運んでいたよな。あれは、恥ずかしがっていたのか。

「柚希ちゃん、やることが男前だなあ……」

思い出し笑いをかみ殺しながら、俺はこっそり呟いた。

中江のアパートを出て、書店で就活のための資料を探していたら、マナーモードにしていた携帯が振動した。

開いて確認すると、柚希からのメールだった。

『碧さんの誕生日、ご存じないですか？』

愛想も素っ気もないメールはいつものことだが、内容に首を傾げながら返信する。

『わからないな。さくらちゃんなら知ってるんじゃないの？』

『碧さんに口止めされてるみたいで、教えてもらえないんです。写真部の名簿に誕生日の項目、なかったですか？』

返信したら間を置かずにレスが来る。電話した方がよかったなと思いつながら、あとひと言うくらいだし、そのまま返信を続けた。

『なかった。学年と学部と、あとは住所と電話番号、メールアドレスくらいだし。もしわかったら連絡するよ』

『ありがとうございます。お願いします』

つきあってる彼女の誕生日がわからなくて、困っているらしい。なんで？ と訊くのは野暮だよな。誕生日を碧と一緒に過ごしたいのだろう。微笑ましくて嬉しくなる。

このふたりのことは、いろいろ心配した分、うまくいつてほしい。しかし、四月に柚希が入部して、夏休みにはかなり仲良かったよな。十一月も末になるのに、まだ、誕生日を知らなかったのかな。九月か十月だったら、来年まで待つしかないのに、どうするんだろう。

そういえば、凜の誕生日はいつかな。

誕生日を過ぎていたら、十一歳。まだなら十歳か。もし誕生日が近いなら、記念写真を撮ってあげる、と提案するのはどうだろう。不自然ではないはずだ。テーマパークにでも連れて行ってあげたら喜ぶんじゃないかな。写真を撮っても自然な流れだし。

……………て、ちょっと待て。なんか変なことを考えてるぞ、俺。これではまるで、彼女とデートをしたがっているみたいじゃない

か。

凜は近所の子どもで、被写体にしただけだろう。

おかしい……。

なんか、変だ。

柚希をモデルにしたときは、普通に頼み込んだよな。おかしい感情は着いてこなかった。いや、そうか。柚希は写真部の後輩だからモデルになってくれと言いやすかった。

だけど、凜はそれができないから、ややこしいことになっているんだ。

俺はようやく、納得した。納得した気になった。

欲求不満かな……。

いま、元カノのアパートから朝帰りだということを、俺はすっかり失念していた。

第十一話

元カノのアパートから朝帰り（後書き）

年の差カップルを書こうと思ったとき、最初は男を年下にする
しか考えませんでした。でも、そうするとまた、恋愛度数が上が
つて、エロい展開になってしまいそう……との判断で男を年上にし
ました。この場面とか、熟女好き云々は、最初の妄想の名残り、み
たいな感じです（笑）

第十二話

年の差カップルとか碧とか

ゼミの空き時間を、俺は部室で自習に充てていた。図書館に行ってもよかったのだが、やはりここの方が落ち着く。

バレエの迎えに行ったときから、ふと気がつけば、俺は凜に思考を巡らせている。

車の中で見た凜の姿が目には焼き付いて、なかなか消えない。

俺は、どうしても凜を写したいらしいのだ。そのことを凜に伝える手段がなくて困っている。

単なる近所の子どもなら、いくらでも頼める。だけど、その相手が許嫁となると、下手に近づけない。少なくとも、自分から故意に近づくのはまずいだろうし。

婚約話さえなかったら、簡単に頼めたのに、困ったもんだ。うーん……。あの婚約話、やっぱりどうにかできないかな。

円満な婚約解消。それが俺の思い描くハッピーエンドだ。

扉にノックの音がした。俺の返事も待たずに飛び込んできたのは、碧だった。

「あれ？ 副部長、ひとりですか？」

「碧ちゃんこそ、珍しくひとり？」

柚希がさくらと一緒に部室に来ることが多かったから、碧がひとりでいるのを久しぶりに見た。タートルネックのセーターにファーがついたブーツ姿をみて、もう季節はすっかり冬だよなと改めて感

じた。

「忘れ物を取りに来たんです。学生課に鍵をもらいに行ったら、なかったから。副部長、こんな時間に、なにしてるんですか？」

「レポートだよ」

「全然、はかどってないでしょ」

「なんでわかるの？」

「資料もパソコンも出してないし」

「実は、物思いに耽ってた」

「悩みでもあるんですか？」

「悩み、とまではいかないけど、結婚について考えてた」

「就活すつ飛ばして、婚活ですか？」

碧は呆れたように、口をぽかんと開けた。

「いや、そんな具体的なものじゃないよ」

「はあ…？」

「碧ちゃん、結婚について考える？」

「あたし、いまのところ、結婚する気はないんです」

「柚希ちゃんとも？」

「瀬戸さんとはつきあいはじめたばかりですよ。結婚とかそんなこと、考える段階じゃありません。でも、瀬戸さんなら、なおさら結婚なんてないです」

「どうして？」

一応かろうじてなんとかギリギリ男女なんだし、戸籍的には問題はないだろう。

「瀬戸さん、恋愛はあたしが初めてだし、それで結婚とか、傲慢じゃないですか？」

「傲慢？」

なんか、想像と全然違う言葉が碧の口から出てきた。てっきり、結婚式で花嫁衣装をどっちが着ればいいかわからない、なんて次元の心配かと思っただのに。

「可能性を奪うみたいな感じ、しません？」

「可能性？ うーん、そうかな？」

「遠い先の時間を拘束する約束でしょ、結婚って。なんか残酷な感じがするんですよ」

残酷というキーワードがまた飛び出した。

女の子が結婚について語るときに、なぜ『残酷』と表現するのか、

理解に苦しむよ。結婚は女の夢じゃないわけ？

「あたし、最初につきあったひとが、十三歳年上だったんです」

「十三歳？　ずいぶん年上だね。どんなひと？」

俺と凜が十歳差だから、さらに年が離れている。俺は興味が湧いて、身を乗り出した。

「ラジオのDJなんです。中三のとき、受験勉強しながらラジオ聴いて、このひとの声、甘くて低くてかっこいいなあって思ったのがきっかけで……」

「へえ、そうだったんだ」

なかなか華やかな出会いだったんだな。ラジオのDJといったら、中学生から見たら、芸能人みたいなもんだろうに。おっかけが高じて……って感じかな。ラジオの収録は案外近所だったり公開してたりするもんな。

「結局、最終的に別れちゃったんですけど、別れなかったら、瀬戸さんと出会っても、つきあわなかったと思うんです」

「なるほどね……」

一年のとき、碧は短いサイクルで彼氏が交代していたが、交際の時期が重なったことはなかった。正直で素直な性格だ。二股できるほど器用でもなければ、平気で嘘つくほど薄情でもないのだ。

「瀬戸さんにとってあたしがそのひとに該当するとしたら、この先

もある気がするし……」

うーん、そうかなあ。柚希に関してそんな心配は無用のように思えたけど、碧の言いたいことは理解できる。

自分の存在が、相手の新しい出会いを妨げるなら躊躇するに違いない。経験値に差があると、どうしても遠慮する気持ちが湧くのだろう。

「カミングアウトしてから、女の子にモテてるんです」

「柚希ちゃん？」

「はい。女だと思われていたときは、友達でも近寄りがたいと敬遠されてたんですけど……」

女としては完璧すぎて友人扱いするのも気おくれるけど、男なら女装も程よい欠陥になるってことか。女の子の心理も面白い。

「佐々木みたいに男くさい奴よりいいのかな」

「そういう子も多いみたいですよ」

「あの美貌で女の子にモテたら、まるで光源氏だね、葵の上」

「……………気づいてました？」

碧は、ばつの悪そうな顔で苦笑する。

「あときは気づかなかったんだ。源氏物語をちゃんと読んだわけじゃなかったから」

「気づかないままでいて欲しかったな」

「女の子の立場から、あんな求愛ダンスは嬉しいの？」

「求愛ダンスって瀬戸さんは鶴じゃないんですけど……。でも、嬉しいですよ」

「そうか。なるほど、なるほど…」

「口説きたい相手でもいるんですか？」

「いや。彼女もいないし」

「許嫁はいるのに？」

話の風向きが怪しくなってきた。俺は慌てて会話を戻した。

「柚希ちゃんは、君だけで充分なんじゃない？」

「どうしてですか？」

「彼女、一途で不器用そうだから」

「彼女じゃなくて、彼なんですけど……」

「あ…」

俺たちは顔を見合わせて笑った。

「そういえば、君ら、つきあう前と変わらないね」

俺はふと思い出して、以前から疑問に思っていたことを口にした。

「変わらないって、なにがですか？」

「お互いの呼び方とか。恋人同士なのに、瀬戸さん碧さんのままだろ」

「ええ、まあ…」

「ふたりのときは違うの？」

「いえ、いつも通りですよ」

「柚希ちゃんは、ふたりきりでも敬語で話してるの？」

「そうですけど、なにか変ですか？」

「いやだって、恋人同士なら名前で呼び捨てにするのが普通かなって」

「なんでですか？」

うーん、言われてみればなんでだろ。そんなこと、考えてみたこともなかった。

ただなんとなく、それが普通と思ってた、としか言いようがない。あえて説明するとしたら、はじめ、かな。もしくは周囲に、この子は自分の彼女だぞとアピールしたいのかもしれない。

「副部长、自分が考えてることを、普通で標準だと思ってるでしょ」

「違う?」

「確かに副部长の考え方って一般的に多いけど、普通とか常識って、ひとそれぞれじゃないですか?」

「……………」

碧は案外するどい発言をする。訊けばそうかも、と頷ける説得力もある。だけどそれなら、普通とはなんだろう。

俺はますます混乱してきた。

「ところで碧ちゃん、君、誕生日いつ?」

「瀬戸さんに頼まれたんですか?」

「『碧さんの誕生日、いつか知りませんか?』とは訊かれたけど、訊きだしてくれとは頼まれてないよ」

「誕生日は企業秘密です」

「彼氏に教えられないような誕生日なの?」

「まあ、そうですね。あたし、子どもの頃から自分の誕生日嫌いだったんで」

「わかった。敬老の日だろ」

「ノーコメント」

碧はなかなかガードが固い。

第十二話

年の差カップルとか碧とか（後書き）

第十三話

部長の事情

碧と話をして、気がついたことがある。

年齢差が同じでも、出会った時期が早いほど、異常性が増すということだ。

たとえば十歳差で考えてみても、五十歳と四十歳ならどうってことないのに、二十歳と十歳なら、変態の領域だ。

碧なんかは十三歳年上だけど、十五歳のときの二十八歳の彼氏と訊けば、恋愛としてはあり得る範囲だもんな。

それにしても、こんなことを考えてる時点で、俺は相当やばいんじゃないのかな。

凜を写したい気持ちが高じて、ストーカーになつたりしないよな。ただ、とにかく一度、凜の親に訊いてみたい。許嫁の話がどんな理由から来ているのかと。たとえば、親同士と一緒に飲んだときに盛り上がって、冗談交じりに口約束した、なんて経緯なら振り回される必要はないわけだし。

そんなことをとりとめもなく考えながら、俺は学生課にずらりと張り出された就職情報を眺めていた。もつと焦らないといけないんだけど、どこでもいいから内定をもらいたい、とはまだ思えないんだ。

できれば興味のある三つか四つに絞って攻めたい。こんな悠長な野望は、数か月後には木っ端微塵になるんだろうか。

「松浦」

名前を呼ばれて振り返ると、篠崎部長だった。

「部長、大学、来てたんですか？」

すでに内定をもらっている部長はこの時期、単位の取得も終わって、卒論に忙しいはずだ。てっきり、アパートに引きこもっていると思っていた。

「部屋より大学の方が集中できるんだよ。図書館の自習室に行ったり、カフェで半日陣取ったりしてる」

「なら、たまには、部室にも顔だしてくださいよ」

「わかった、わかった。近いうちに必ず行くよ。それより松浦、昼飯、食った？」

「いえ、まだです」

「学食、行くか？」

「そうですね、お供します」

昼時ひるときはいつも込んでいる学食だが、いまは少し時間がずれているから空席が目立つ。

「このA定食、食うのもあと少しだと思うと、なんか寂しいな」

「ははは。俺はあと、一年食わなきゃいけないのかって気分ですけどね」

「来年の今頃になったらわかるって」

そんなもんかな。まずはないけど飽きるよな。ほとんど変わり映えないし。

白身魚のフライを齧りながら、俺は部長に就活のことを尋ねた。

「部長、就職先を選ぶときに、なにを最重要視しました？」

「まあ、ありきたりだけど、仕事内容だな」

「やっぱりそこですよな」

「だが、それは入ってから動かされる可能性もあるだろ。開発希望してても営業に移動するかもしれねえし、広報かもしれねえし」

俺は頷いた。

「だから、どこの部署に異動になってもやれるところを選びたいよ」

「それは確かに言ってますね」

「あとは転勤がないとこだな」

「転勤？」

「俺の場合、彼女が短大卒でもう、社会人だし」

俺は少なからず驚いた。コンパで彼女との結婚について訊いたとき、それほど積極的な姿勢は感じられなかった。彼女と結婚することを視野に入れて就活していたとは、恐れ入った。

「仕事内容に加えて、場所と転勤がない事なんて条件に入れて、よく内定にこぎつけましたね」

それだけ優秀なひとなんだろうけど、凄いよ。

「理数系はまだ、職種も多いからな」

部長は箸を置いて、お湯みたいに薄い学食のお茶を、喉に流し込んだ。

「俺はむしろ、枠を作ってもらえて有難かった。選ぶ会社が多すぎたら、迷ってきりがなかっただろうし。だから、彼女が先に社会人になってくれててよかったんだ。もし俺が先に社会人になっていて、彼女が俺を追いかけてくるって言ったら、絶対反対しただろうしさ」

「なんでですか？」

順番が逆になるだけで、同じことなんじゃないのかな。

「俺が原因で仕事を選んだりして振り回すのは、避けたかった」

これを優しさと受け取るか身勝手と受け取るかは、意見が分かれそうだな。

彼女が就職するときには自由に選べたけど、部長は制限された中で職場を選んだわけだ。彼女からしたら、精神的に負担もあったんじゃないかな。ここまでしてもらったから、絶対このひとと結婚しなきゃいけないのだとプレッシャーになるかもしれないし。

「そっぴいやお前、例の許嫁はどうなった？」

急に話を振られて、俺は口の中のサラダが喉に詰まるかと思った。

「どうもなるわけありませんよ。小学生なんですから」

「でもお前のことだから、気にはしてるんだろ」

「ええ、なんとか白紙にしてもらいたいと思ってます」

「いつそ、育つの待って結婚しちまえばいいんじゃないか？ 親が決めた相手ってのは、相性がいいんだろっし、松浦はだれが相手でも問題なさそうだぞ」

「部長、無茶言わないでください」

「冗談だって」

俺はこっそり嘆息した。また相手がだれでも同じ、といった判定をいただいた。

それほどモテるわけではないけど、二の足を踏まれるほど見苦しいわけでもない。それなりに恋愛経験もあるのに、なんでこんな評価ばかり受けるのかな。

「俺って、そんなに恋愛に無気力に見えますか？」

「え？」

「最近よく言われるんですよ。だれとつきあっても同じだろう的なこと」

「ああ、なるほど。松浦は彼女を特別視しないからな」

「特別視？」

「たとえば、友達と約束してる日に、彼女が遊びに行きたいって言うてきても断るだろ？」

「そりゃ、先に約束してれば断りますよ」

「お前は友達でも後輩でも彼女でも、同じ扱いしかしそうにないんだよ」

「ええ」

そんなはずはない……と思う。

だけど、俺にそんなつもりがなくても、相手は部長と同じ受け止め方をしていたのかもしれない。

全力でだれかを好きになったこと、あっただろうか。他のなにより優先したいひとに出会ったことがあっただろうか。

思い返しても記憶にないことに、俺はショックを受けた。

「松浦は、恋愛より結婚に向いてんじゃないか？」

「恋愛の集大成でしょ、結婚は」

「俺の彼女は、恋愛と結婚は別だって言うぞ」

「そうなんですか？」

部長に頷かれて、俺は考え込んだ。男と女では結婚観が違うのかな。女の方が結婚に対して冷静なのかもしれない。

高校のときの恋愛は、夢の中のようなときめきだった。二十歳を過ぎて、就職や将来が見えてくると、恋愛も現実を帯びてくる。相手の欠点を受け入れながら、時間の流れを考える。

実際、大学で出会い、卒業して結婚したカップルは多かった。

だがいまの俺には、恋愛と結婚を切り離して考えることもできないし、結婚と就職活動を連動させて動かすこともできない。

とりあえず願うは、部長が長年連れ添った彼女に、振られませんようにってことだ。

第十三話

部長の事情（後書き）

写真部の男共は、どうも頼りないというか弱腰な感じですよ。柚希も含めて。

唯一、部長だけは少くくしただけ、俺様キャラのつもりだったんですが、なんか怪しい気配がしてきました。

第十四話

佐々木の正体、発覚

十二月に入り、急に寒さが本格的になった。

その日、ゼミが終わって部屋に行くと、佐々木と柚希がすでに来ていた。部屋がすっかり暖まっているので、どちらかはかなり前に来ていたのだろう。

「早いな、ふたりとも」

「こんにちは」

「俺は今日、午後からの選択授業が休講になったんすよ」

先に来ていたのは、佐々木のような。
しばらくすると、碧とさくらが到着した。

「碧さん、その髪、どうしたんですか？」

柚希が問いかける声に反応して、俺の視線も碧の頭に移動した。
確かにちよっと、はねている。いや、広がっている？

「風とか静電気とかの猛攻撃で、パリパリする」

「束ねたほうがよくないですか？」

「括ってたけど強風でぐちゃぐちゃになって、さくらに外されちゃった」

「小畑さん、碧さんをいじめないでください」

「だって、すごく不細工になってたんだもん。ちゃんと括ってないから風ぐらいで崩れるんだよ。碧が不器用すぎるの」

「ええ、なんでよ。そんなに不器用じゃないもん」

「はいはい。そんなわけだから、瀬戸さん、これ、どうにかしてあげて」

さくらが溜め息交じりに肩を竦めた。

「はあ……。碧さん、どうします?」

「どうにかしてあげて」

おいおい、文学部のくせに、日本語おかしくないか?

「じゃあ、後ろで編み込みますね」

頼まれた柚希は、なんとも思っていないらしい。愛の力かな。すごい力だな。

言葉通り、柚希が碧の髪を編み込んでいく。器用なもんだ。

しかし、碧はやはり不器用だったのか。そうじゃないかと思ってたんだよな。なにをさせてもどんくさいところがあるし。

ときどき碧は、妙に複雑な髪型のことがあるけど、あれは柚希がしていたんだな。柚希もいじらしいというか、なんとというか……。

そういえばこの間、凜は髪を綺麗にまとめていたよな。あれから

お袋に訊いたら、バレエに行くとき、母親が仕事の日はひとりでバスに乗っていくそう。凧の母親もできる限り夕方に帰れるシフトを組んでいるらしいのだが、人手不足もあって、夕方の勤務と習い事が重なってしまう日があるようだ。迎えに行くときは間に合うようにしていたのに、ついに先日、迎えに行けない事態になってしまったのだ。

凧がひとりでバレエに行くときは、当然身支度も自分でしているわけで、あの髪も自分でしていたのだろう。

女兄弟がいなかったから、凧がすっかりしているのかどうか判断できないが、碧の有り様を見ている限り、たいしたものだと思うてよさそう。

「松浦さん、こういうの珍しいんですか？」

食い入るように見ていたら、柚希に尋ねられた。

「珍しい。面白いから、写したい」

「私はべつにかまいませんけど」

「あたしもいいですよ」

被写体ふたりの許可が下りたので、俺はカメラを構えた。

写真部の部員に、この手の頼みを断られたことはない。お互い、写し合って練習することも多いからだ。

部室では何度か撮影したことがあるから、だいたいの光量は把握している。柚希と碧をふたり入れるなら、コントラストは落とし気味にして露出をあげるか。思い切って、シャッター速度を極端に遅くして、ブレさせても面白いよな。あまりのんびり迷っていたら、

柚希の作業が終わってしまいそうだから、俺は露出をあげて写すことにした。

「柚希ちゃん」

レンズ越しに声をかける。

「はい？」

「それ、難しいの？」

ピントを合わせた指の動きは複雑で、見ている限り、難しそうだ。

「わりと簡単ですよ」

「後ろでひとつに丸くまとめる髪型、知ってる？」

「日本髪ですか？ 着物のときにするような」

シャッター音にかまわず、会話を続ける。

「いや、違う。バレエや体操選手がするようなやつ」

「ああ、シニヨンですね」

「名前があるんだ」

「はい」

「難しい？」

「私はしたことがないんですけど、慣れればできるみたいですよ。シニョンは私より亜衣の方が詳しいんです」

「へえ。どうして？」

「亜衣は以前、バレエを習ってたので、自分でシニョンにしてたんです」

「なるほどね」

「シニョンがどうかしたんですか？」

「近所の子がしてるのを見たから、難しいのかなと思ったんだ」

話してる間に碧の頭は完成したらしい。

「あー。すっきりした。瀬戸さん、ありがとう」

「どういたしまして」

笑顔を交わし合うふたりの様子は、やはり恋人同士なんだよな。うーん、なんかちょっと、

「…寂しい……」

「は？」

「妹を嫁に出したみたいない気分だ」

「碧さんのこと、妹みたいに思ってたんですか？」

「いや、妹のように思ってたのは君だよ、柚希ちゃん」

「……あの、ビミョーに迷惑なんですけど。せめて弟にしてもらえませんか？」

「それがさ、俺には君と同年の弟がいるんだよ。この弟が、君とは似ても似つかないから、仮でも弟にはたとえられない」

「だからって……」

柚希は眉をひそめて、唇を尖らせた。部室に笑い声が広がった。

「あー、でもそれ、わかります。俺も弟いるし」

手を叩いて笑いながら、佐々木が俺に同調した。

「佐々木くん、弟いたの？」

さくらが意外そうに尋ねる。

「弟、つっても、俺、双子だし、年は一緒だけどな」

「嘘ッ！ 佐々木くん、双子なの？」

碧が飛び上がりそうな勢いで振り返ると、佐々木の言葉に食いついた。

「あ、ああ、そうだけど……？」

「ひどい！ そんな大事なこと、なんで今まであたしに内緒にしてきたのよ？」

「ひどいって、大事なことって、内緒って…。え？ え？ なんて？」

佐々木は碧の剣幕に、あとずさった。

あーあ、これはまた、面倒なことになった。

しかし、佐々木は双子だったのか。知らなかった。

俺はこっそりさくらの方を見た。お互いタイミングが重なって、目と目が合った。俺が佐々木に視線だけ向けて暗黙のまま尋ねると、さくらは首をブンブン振った。さくらも佐々木が双子だったことは、知らなかったようだ。

「別に、内緒とかじゃねーけど、わざわざ言いふらすよーなネタでもねーし……？」

佐々木は、碧に詰め寄られて戸惑っている。いまいち、事態と状況がわかっていないのだ。

「ねえ、どんな弟なの？」

「どんな、つつてもなー……」

「似てる？」

「一卵性だし、顔とか体格は似てんじゃねーか？」

「うわー、一卵性なんだ。そっくりのヒグマが二頭……。可愛い」

うつとりと呟いて、碧は身もだえしながら喜んでいる。

碧の目にも、佐々木は熊に見えるんだな。こんなでかい熊が二頭もいたら、可愛いよりむさ苦しいと思うんだが……。しかし、この状況で心配なのは佐々木や碧ではなく、柚希だ。

俺はドキドキしつつも柚希に視線を向けた。

……………表情がない。怖い……。

なまじ綺麗な顔だから、すごい迫力だ。碧が佐々木に興味を持ったのが、相当不満なんだろう。

碧は双子でありさえすれば、だれかれかまわず愛せる特殊体質だからなあ。なんて傍迷惑な体質なんだ。

「へー、兄弟そろって鉄道マニアなんだ」

「まーな。弟は乗り鉄だけど」

「乗り鉄ってなに？」

佐々木と碧が盛り上がっている。このふたりがこんなに仲良くしているのを初めて見た。見慣れないから、違和感ありまくりだ。

しかし、碧の鈍さは殺人的だよ。彼氏の前で他の男に興味津津な自分の罪に、なんで気づかないのかな。

だいたい、佐々木も碧の双子好きを知らなかったのか？ 結構、部員の中では有名な話だから、とくに全員知つてるとばかり思ってた。

柚希も素直に、自分以外の男に興味を持つなと言えればいいのにな。あんまり気の毒なので、俺は助け舟を出すことにした。

柚希の死角になるように背中を向けて携帯を開き、碧にメールを打った。

『君の光源氏は焼餅やきみたいだよ』

ポケットに携帯を突っ込んでから送信ボタンを押した。

さっき写した写真をカメラの液晶に表示させてチェックしていると、少し離れた場所から携帯の着信音がした。顔を上げて確かめてみるまでもなく、碧の携帯だ。

碧が携帯を開く気配がしたが、俺は知らん顔を決め込んだ。

「あれ？」

声を出したあと、碧は考え込むように口を噤んだ。俺を見ているかもしれないから、余計に素知らぬふりでカメラから視線を上げない。

「瀬戸さん、焼餅やきななの？」

ストレートに訊くんかいッ！ 俺は頭痛がしそうだった。

「そんなことないですよ」

そして柚希は恐ろしく恋愛下手だ。肯定しとけばいいものを……。

「だよねえ」

笑顔で頷き合っているのが、悲惨きわまりない光景に見えてきた。できるだけこのふたりには、かかわらないようにしよう。とてもじゃないけど、手におえない。

「佐々木さん」

柚希に呼ばれて、佐々木は顔を上げた。

「ん？」

「すごく迷惑なんで、やめてもらいたいんですけど」

「へ？ なにを？」

「双子を」

「は？ なんで？ どうやって？ つーか俺、柚希ちゃんになんか迷惑かけた？」

佐々木がわけもわからず、おたおたしている。柚希の方が学年はひとつ下なのだが、どうも佐々木は柚希に弱い。十月までは柚希を女の子だと思っていたから、その名残りだろうな。ひとのことは言えないけど。

「弟さんと合体してひとりになるとか、出来ないんですか？」

知性溢れる法学部の学生が、無茶なことを言っている。よほど頭に血が上っているらしい。

「ロボットじゃねーのに、できるわけねーよっ」

佐々木が盛大にかなりたてる。

「……………まあ、これはどう見ても佐々木が悪いよな」

「そうですね」

俺とさくらが溜め息をついて肩を落とすのを見て、佐々木がますますパニック状態になった。

「なんで？　なんで？　俺がなにしたって言うんだよーッ？」

なにつてそりゃ、双子だよ。

第十四話

佐々木の正体、発覚（後書き）

この場面は、前々作「恋を感じるとき」の最終話に入れようと思っ
てました。

でも、最終話は5000字くらいになってしまつて、脇役のちんた
らした話をぶち込む隙間がなかったので、なくなった部分です。

結構好きなお話です。楽しいし（笑）

佐々木君は元々、便宜上名前を付けただけで、たいして存在感のあ
る役ではなかったはずなんですが、途中から書くのが面白くなった
人物でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777z/>

M大写真部副部長の喧騒

2011年12月15日22時47分発行